

体験活動をとおして 青少年の自立を促進する ためのプログラム開発

National Institution For Youth Education

平成28年度
プログラム
開発事業

中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立若狭湾青少年自然の家  国立妙高青少年自然の家  国立乗鞍青少年交流の家
 国立能登青少年交流の家  国立立山青少年自然の家



National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

「別世界だね」

「さっきまでは霧の中だったのにね」

つらい山道も仲間がいるから頑張れた

歩き続ければ

今と違う世界につながる

諦めずに、あと一歩

自分の足で、もう一歩

体験活動をととして青少年の自立を 促進するためのプログラム開発

目次

青少年教育施設へのメッセージ

信州大学理事・副学長	平野 吉直先生	3
筑波大学人間総合科学研究科 教授	坂本 昭裕先生	4

体験活動を青少年の自立につなげるために	5
---------------------	---

プログラムのポイント

国立若狭湾青少年自然の家「わかさわん うみはともだち ～幼児の海での体験と指導者養成を連動させて～」	7
国立妙高青少年自然の家「MYOKOチャレンジ2016 ～自分の足で歩く100kmトレイルへの挑戦～」	11
国立乗鞍青少年交流の家 「自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー(大学生)」	15
国立能登青少年交流の家「能登宿泊体験合宿」	19
国立立山青少年自然の家「夏のチャレンジキャンプin立山2016」	23

研究の成果と課題	27
----------	----

事業を終えて	29
--------	----

プログラム開発の概要	30
------------	----

国立青少年教育施設における実践的研究の必要性

信州大学 理事・副学長 平野 吉直 先生



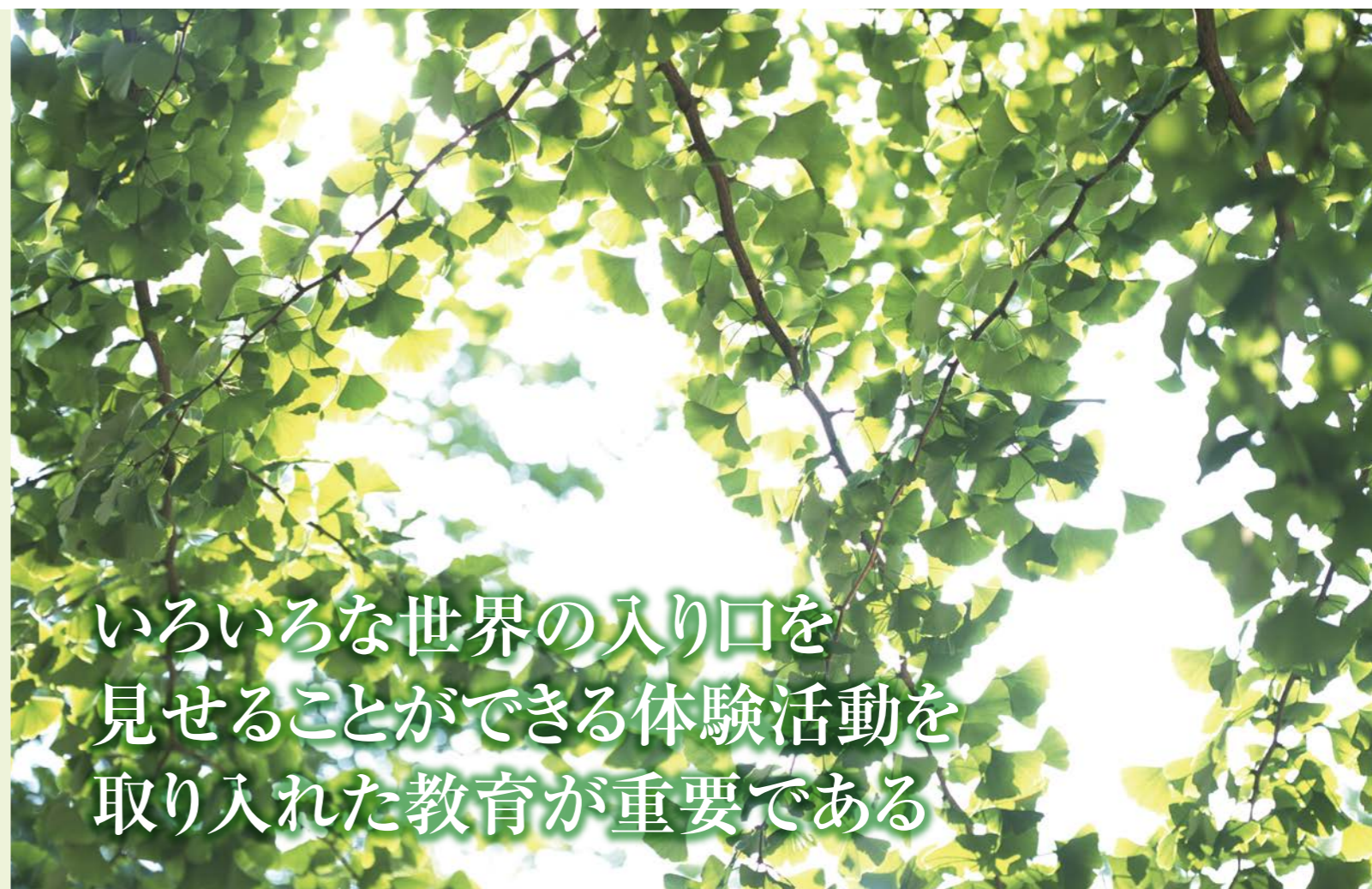
私たちの社会は、豊かで便利な生活が保証されるようになった一方で、少子高齢化、経済格差、グローバル化、情報化といった急激な変化により、子どもたちから自然との触れ合い、屋外での活発な遊び、他者との親密な交流といった

体験的活動の機会を奪っています。私は、家庭裁判所と連携した非行少年のキャンプを15年ほど続けていますが、このキャンプに参加する少年を見ていても、現代社会の影響を強く受けていると感じます。他者と適切なコミュニケーションをとることができない少年、自信や自己効力感が欠けていると思われる少年、立ち止まって熟慮することが苦手な少年、うまく自己表現のできない少年など、今日の青少年の教育課題をそのまま背負っているように見受けられます。不登校、いじめ、児童虐待、非行、ネット依存など、青少年の教育上の問題は、ますます多様化・深刻化し、こ

れらの問題に関連した事件等の報道は後を絶ちません。

中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」（平成25年）においても、「体験活動は人づくりの“原点”であるとの認識の下、未来の社会を担う全ての青少年に、人間的な成長に不可欠な体験を経験させるためには、教育活動の一環として、体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが求められている。」とし、青少年の体験活動の意義や効果を整理するとともに、現在の課題や今後の推進方策について提言しています。

こうした状況の中で、国立青少年教育施設が連携して、青少年の自立を促進するための自然体験活動プログラムを開発・実践し、その成果報告をとりまとめたことは、時宜にかなった意義ある取り組みであり、高く評価したいと思います。国立青少年教育施設における実践的な調査研究の取り組みが今後さらに進展し、多くの成果やデータが蓄積され、子どもたちの体験活動が広く普及することを願っています。



いろいろな世界の入り口を見せることができる体験活動を取り入れた教育が重要である



体験活動は、青少年が抱える様々な課題の解決の一つのアプローチである

青少年教育施設へのメッセージ

筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生



かつて、わが国では青少年の自立を促すための知恵として通過儀礼（イニシエーション）が用いられていました。通過儀礼とは、たとえば子どもから大人へと人間が成長していく過程で、次なる段階の期間に新しい意味を付与する儀礼として古来より行われてきたものです。たとえば、元服、裳着・結髪、そして現代では成人式、立志式などがよく知られているものでしょう。しかしながら、現代社会においてこのような儀礼の多くは、形骸化し本来の意味が変化してしまい、全くその効力を失ってしまったと言われていました。さらに、少子化の流れにあって手厚く育てられてきた青少年たちは、意欲的に自分自身で考え行動する力、すなわち自立する力が低下してきていることも指摘されています。

こうしてみると現代の青少年はかなり難しい時代を生きているように思います。今日の社会にあって通過儀礼とい

う知恵を失い、自らが生きてゆく意欲や喜びを見いだしにくくなっているからです。したがって、われわれ大人は、青少年が自分で何かに気がつき、自分の力で困難を乗り越えてゆくような自立する力を育むことを支援する方策を考える必要があるのではないのでしょうか。このような意味において、青少年教育施設の果たす役割は、きわめて重要であると思います。それは、現代において青少年の自立を促すためには、自ら考え自ら行動し課題を乗り越えてゆくような体験活動を行うことが最も有効な支援方法であると考えられるからです。

通過儀礼では身体的な苦痛や試練をとまなうことが成長のための重要な要素となっていたとのことです。体験活動と通過儀礼は似て非なるものなのですが、青少年教育施設における体験活動には同様な要素が多くあるのではないのでしょうか。施設においてプログラムを体験する多くの青少年が成長を遂げてゆくに違いありません。本プロジェクトの成果が青少年の自立の一助となることを期待しています。

体験活動を「青少年の自立」につなげるために

体験活動と指導のあり方、それを支えるスタッフ

体験活動の良し悪しを左右するのは、プログラムの中身もさることながら、指導のあり方やそこに携わるスタッフが大きなウェイトを占めます。青少年の自立を促進するために必要な教育的手法やエッセンスについて、中部・北陸ブロックの取組から共通して得られたことをプログラムデザイン・指導のあり方・スタッフ研修のあり方の3つの観点からまとめました。

① プログラムデザイン

プログラムデザインで大切なこと

困難なことや今までにやったことがないことに直面したとき、それを乗り越えることで成長を感じられることがあります。また、仲間と協力したり、自分たちの行動を自分たちで決定する自己決定の場が自立につながると考えます。3つの視点からプログラムをデザインしました。

視点1〈これまでの成果を生かして〉

- ① 昨年のプログラムを活かして：昨年実施したプログラムのブラッシュアップ
- ② 体験学習のサイクル：体験していることから学ぶという学び方。「体験→指摘→分析→仮説化→次の体験」を繰り返しながら学び成長していく過程
- ③ 段階的なプログラム：プログラムを出会い→協力→自立→挑戦の4つのステージに分けるなどプログラムのメリハリをつけるとともに、ステージ制で実施
- ④ 参加者の実態とねらい：参加者理解と事業のねらいのマッチング

視点2〈課題設定のバランス〉

- ⑤ 人（個人・グループ）：適切な難易度・負荷となる課題設定
- ⑥ 挑戦できる内容：頑張れば出来そうで、やってみたくなる内容
- ⑦ 仲間と協力できる内容：一人だけでは達成できず、仲間との協力が不可欠な内容

視点3〈自立を促進するための場の設定〉

- ⑧ 自己決定の場を設定：自分たちで自分たちのやることを決定できる場
- ⑨ 自分と向き合える場：一人になり自己を内省する場

② 指導のあり方

指導で大切なこと

プログラム実施中に参加者が何かをやらうという時は、一人で黙々とやる場面はあまり多くありません。仲間と関わり協力したり、スタッフとの関係が大きな役割を果たします。指導のあり方では5つのポイントがありました。

視点1〈カウンセリングマインド〉

- ① 受容・共感・傾聴：事業実施中は様々な衝突やトラブル成功体験など、こちらが意図しないことも多々起こります。参加者の状態や言葉に耳を傾け、共感し、受容するカウンセリングマインドが大切です。
- ② 個別対応：参加者は様々な背景を持っており、同じ人は一人として居ません。参加者個々の特性を理解し、それぞれに応じた声かけや対応が大切です。
- ③ 自己肯定感：参加者の頑張りや良さを伝えるなど、自己肯定感を向上させる関わりが大切です。

視点2〈ファシリテーション〉

- ④ ファシリテーション：成長段階が未熟な場合は、介入度は高く、成熟していれば参加者に任せるなど、個人・グループの成長に合わせた介入と関わりが大切です。
- ⑤ 自主性・主体性：プログラムを作りこみすぎると、参加者の自主性・主体性がなくなります。参加者が自分たちの行動を決定する場の設定が自主性・主体性につながります。

受容・共感・傾聴

参加者の意見に耳を傾ける。カウンセリングマインド

個別対応

参加者の個に応じた声かけや指導

自己肯定感

参加者の頑張りや良さを伝える

ファシリテーション

個人やグループの成長に合わせた介入と関わり

自主性・主体性

あれこれ作りすぎず、参加者の自主性・主体性を尊重

③ スタッフ研修のあり方

スタッフ研修で大切なこと

スタッフには、学生ボランティアから自然の家や交流の家職員、連携先のスタッフまで様々な立場のメンバーがいます。スタッフ研修で押さえておきたい3つのポイントをまとめてみました。

視点1〈伝達・レクチャーすること〉

- ① スタッフの心構え（時間を守る・守秘義務・健康第一・一緒に楽しむ）
- ② スタッフ間の共通理解（ねらい、目的）
- ③ 安全管理（ココロとカラダ）

担当スタッフとして共通に知っておくこと、理解しておく必要があること、普遍的で担当者として押さえておきたいことについては、主担当から、伝達・レクチャーという形で共通認識を持っておくことが大切です。また、安全管理はすべての活動の土台となります。ここでしっかり押さえておきましょう。

視点2〈協議・ミーティングすること〉

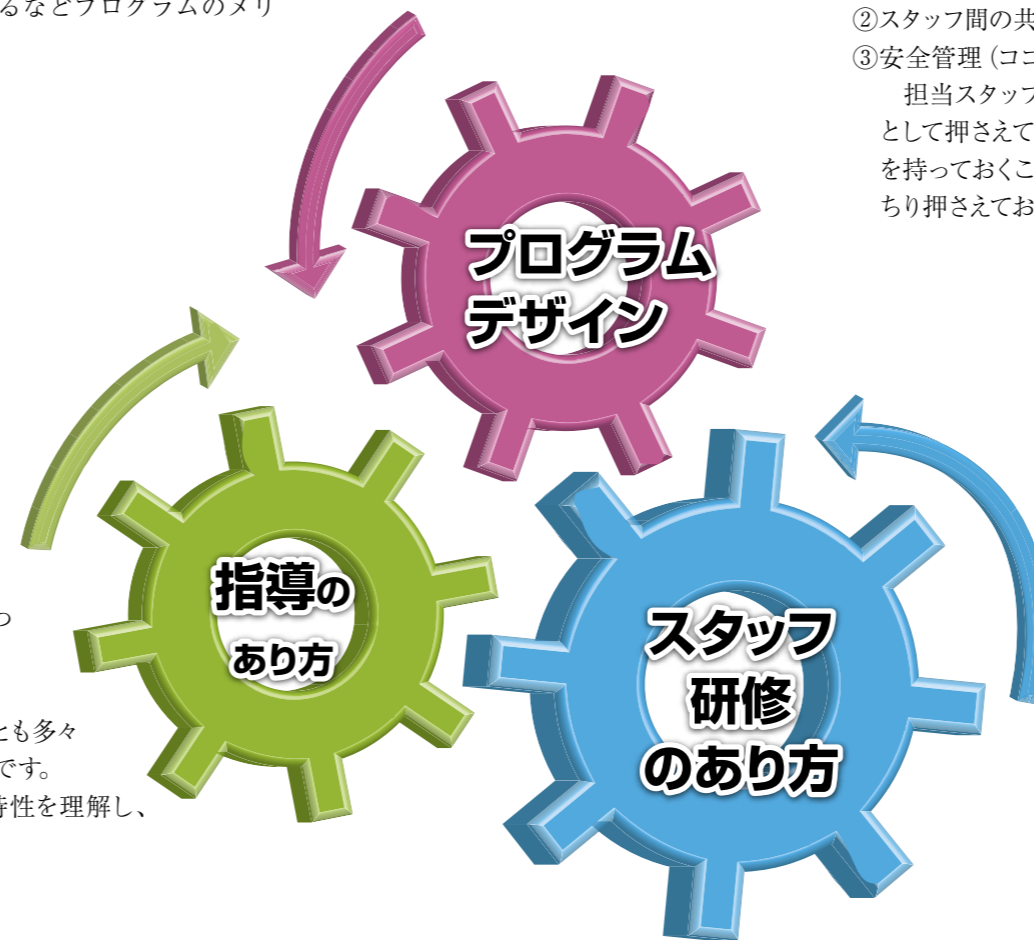
- ④ スタッフ間の共通理解（オモイの共有）
- ⑤ スタッフ間のコミュニケーション（ほうれん草と春菊）

事業に対する思いや実施中に起こる様々な葛藤やトラブルなど、担当者間で共有し、統一的な教育的支援をする必要があります。すぐに相談できるスタッフ間のコミュニケーションやハウレンソウ（報告・連絡・相談）と、シュンギク（旬時・瞬時に聞く）の体制をとることが大切です。

視点3〈実践・トライすること〉

- ⑥ 活動フィールドの確認・事前の下見
- ⑦ 野外炊事や海の活動など実施方法の確認

参加者をリードするスタッフが、その場所に行ったことがなく、やったことがないと、指導がおぼつかなくなります。そうならないために現地や手順を確認し、実際にやってみることをお勧めします。



伝達

- ・スタッフの心構え
- ・スタッフ間の共通理解（ねらい・目的）
- ・安全管理

協議

- ・スタッフ間の共通理解（オモイの共有）
- ・スタッフ間のコミュニケーション（ハウレンソウとシュンギク）

実践

- ・活動フィールドの確認
- ・実施方法の確認

保育園・幼稚園・こども園との連携

国立若狭湾青少年自然の家 National Wakasawan Youth Outdoor Learning Center

わかさわん うみはともだち

～幼児の海での体験と指導者養成を連動させて～

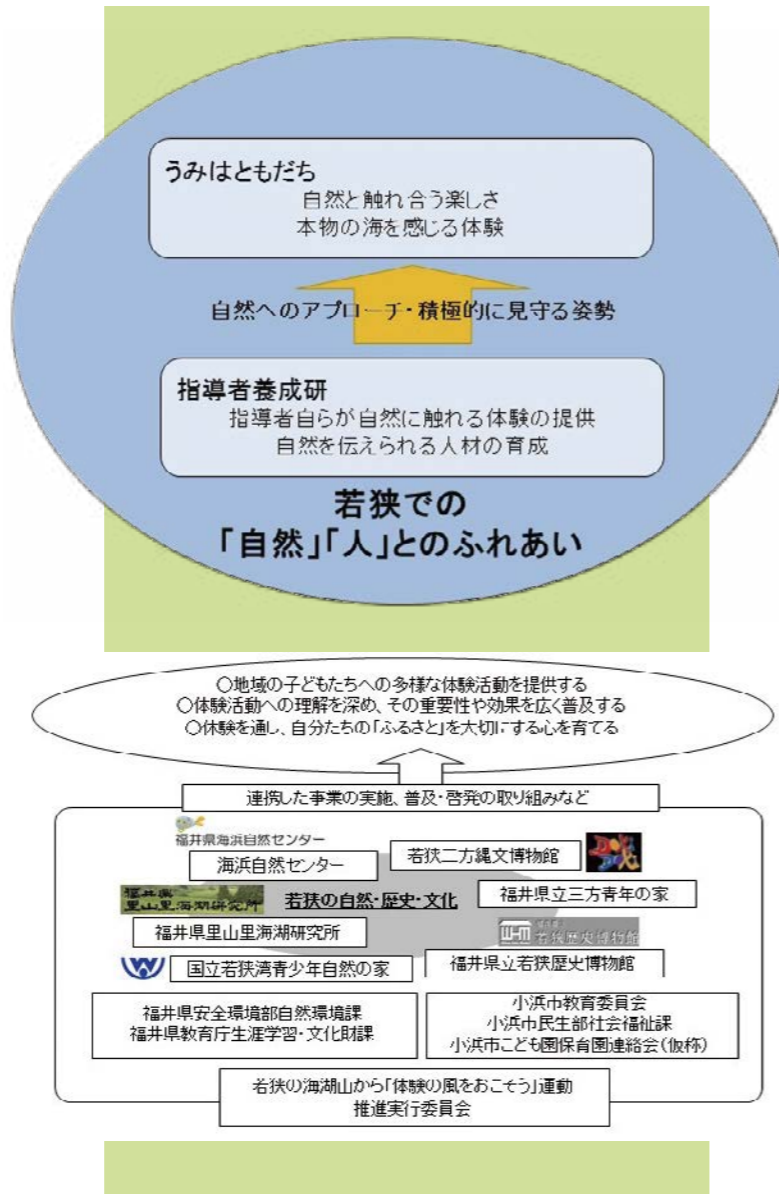
1 事業の概要・目的

(1) 事業の概要

平成 27 年度より、福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織した。その事業として、小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児（年長児）対象の「わかさわん うみはともだち」を2年間実施した。

昨年度は、「幼児の自然体験活動指導者養成研修」において、シーカヤックや野外炊飯、スノーケリングなどを通して、幼児教育に携わる者自身が実際に自ら様々な体験することで、自然や体験活動に対する理解を深めることをねらいとして実施した。「わかさわん うみはともだち」では、砂浜遊びやハイキングを通して、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせることをねらいとし、実施した。

今年度は、「わかさわん うみはともだち」を海編、山編と分け、実施時期を昨年度の9月から、8月と10月に分け、より季節を感じることでできる日程を組んだ。



(2) 事業の目的

- ① 幼児の自然体験活動指導者養成研修
 - ・低年齢期からの体験活動の重要性が指摘されている今日、幼児教育に携わる者自身が実際に自ら様々な体験することを通して、自然や体験活動に対する理解を深める。
 - ・若狭湾の海や山での自然体験を通して、自然を知り、自然に興味を持ち、自然について伝えられるような自然体験活動の指導者になるためのきっかけを提供する。
- ② わかさわん うみはともだち～海編・山編～ 対象は5歳児（年長）
 - ・自然体験を通して、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせる。
 - ・若狭湾の海で遊ぶことで、より海を身近なものと感じられるようにする。
 - ・普段の保育に、海や自然とのふれあいをより取り入れるきっかけとなるようにする。

2 活動内容

幼児の自然体験活動指導者養成研修 平成28年7月28日(木)～7月29日(金)

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	
7月28日(木)			受付	オリエンテーション 開講式	シーカヤック の技術	「自然体験活動 の技術」 の技術	昼食休憩	無人浜へ シーカヤックで	「自然体験活動 の技術」 の技術	スノーケリング	「自然体験活動 の技術」 の技術	テント設置と野営 (無人浜で実施)				「無人浜で 自然体験に ついて考える」	就寝
7月29日(金)		起床・朝食		シーカヤックで 自然の家へ	スノーケリング	「自然体験活動」 の技術	事業のまとめ	解散	閉講式								

わかさわん うみはともだち～海編～

平成28年8月29日(月) 90名(浜っ子、中名田、今富そらのとり)
8月30日(火) 93名(聖ルカ、松永、宮川、国富、やまなみ)
9月1日(木) 79名(加斗、チューリップ、内外海、口名田、遠敷)

	9:00	10:30	12:00	13:00	14:30		
	各回同日程 園出発		自然の家着 はじめの会	【海の活動】 ・磯遊び ・磯観察 ・砂浜遊び 等	昼食 【持参弁当】	【選択活動】 ・クラフト ・磯遊び 等	(各園) 自然の家発 おわりの会

わかさわん うみはともだち～山編～

平成28年10月18日(火) 59名(宮川、聖ルカ、中名田、口名田)
10月21日(金) 44名(松永、加斗、国富、遠敷)
10月26日(水) 90名(やまなみ、浜っ子)
10月31日(月) 69名(内外海、今富そらのとり、チューリップ)

	9:00	10:30	12:00	13:00	14:30		
	各回同日程 園出発		自然の家着 はじめの会	【山の活動】 ・ハイキング ・木の実採集 ・吊橋体験 等	昼食 【持参弁当】	【選択活動】 ・クラフト ・森遊び 等	(各園) 自然の家発 おわりの会

3 自立を促すための手立て

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修

◎指導者に自然を体験してもらい、子どもたちへの支援につなげる◎

昨年度に引き続き、当施設の元事業課長であり、「新しい公共」型の管理運営に向けた運営協議会委員で、小浜市内の子ども園々長をされている大森和良氏とシーカヤック冒険家であるグランストリーム代表の大瀬志郎氏を招き、「シーカヤック」と「スノーケリング」で思う存分に海を感じようという事で参加を募った。また、今年度は、シーカヤックで海を渡り、無人浜



でのキャンプをすることで、より自然に触れる体験をしようと企画を立案した。今年度は20名から申し込みがあり、小浜市の保育園の保育士さんのもとより、ホームページで募集をしたこともあり、県外の保育士さんや野外活動に興味のある方などの参加があった。アイスブレイクの後、まずは海で浮き、心身共に大自然に浸る経験をした。カヤックの講習の後、無人浜へ向けてシーカヤックツーリング。2人ペアでの漕艇になり、互いにいろんな話をしながら漕いでおられた。

また、野外炊飯では、それぞれの特技を生かし、火おこしをしたり、調理をしたりと仲間と協力しながら進めておられた。

ふりかえりでは、「こんな自然体験を子どもにもさせてみたい」「ゆっくりと自然に浸ることができた」などの感想が得られ、大変有意義な時間になった。



(2) わかさわん うみはともだち～海編～

◎本物の海に自由に触れ、「楽しい」を広げていく◎

昨年度の10月中旬から、日程を8月下旬と9月上旬に移動し、より水温が高い状態での実施を目指した。また、午前には海に入り、午後から山へ行くスタイルを昨年度はとっていたが、着替えの時間を鑑みて、海でゆっくり過ごすことをねらいとして午前にはたくさん時間をかけて海体験を実施した。そのため、磯遊びをする園はあったが、天候もよかったせいか、クラフト体験をする園は皆無であった。

波が高い日が多く、フローティングジャケットを着た園児たちは、高い波に入っていくことにドキドキしながら、恐る恐る波打ち際に立っていた。波が小さな園児たちにかかり、転んでしまうこともあったが、それが楽しさにもつながった。何時間も海に入って遊ぶ園児や、砂浜で砂遊びを始める園児、保育士さんの手を放すことなくじっとしている園児など、それぞれの生活体験の様子がよくわかる光景が広がった。

(3) わかさわん うみはともだち～山編～

◎山体験から自然をより身近に感じさせる◎

海だけでなく、山にも入って自然体験をしようと山編と題して実施した。自然の家から、沖の石を一望できる歌碑まで約50分の道のをハイキングした。袋を持参してどんぐりや変わったのはっぱを収集しながら歩いたり、展望が開ける歌碑まで歩いてから、周辺散策をしたりと各園は園児の実態に応じて歩き方を工夫しながら、園児たちに自然体験ができるよう「場」の提供ができるよう心掛けておられた。

4 評価・考察

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修

参加者の感想から

・改めて、裸足で過ごす事の良さを感じました。泥んこ遊びや裸足での運動会参加などが廃止されている今、足の裏から得られる感覚が少なくなっています。2日間、ほとんど裸足で過ごし、砂や海藻の柔らかさや、岩の硬さや冷たさを改めて感じられる経験は少ないので良かったです。

(2) わかさわん うみはともだち～海編～の事前事後の絵画分析から

今年度も参加全園児から海に対する絵画を「わかさわんうみはともだち～海編～」の事前事後に実施し、その傾向を探った。

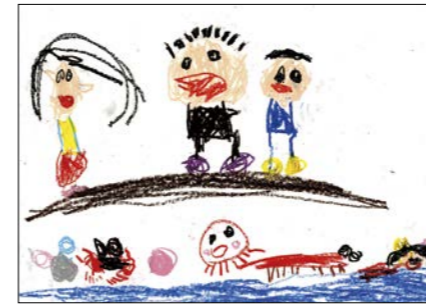
友だち印象型



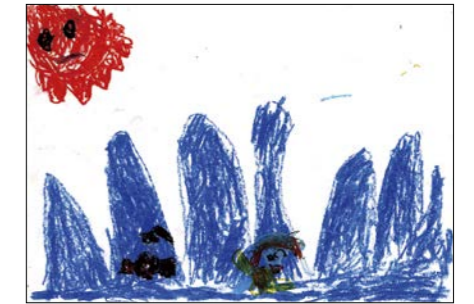
知識にあった生き物との楽しい絵から、一緒に遊んだ友だちとの記憶が強く残った絵になっている。



波印象型



海と距離があったのが波をかぶった経験を描いている。波の経験がスケール大きく描かれている。



景色印象型



海と太陽だけの印象から、海の方の山々が描かれ、友だちと一緒に遊ぶ空間が山で囲まれていることが印象に残っている。



(3) 次年度へ向けての検討課題

今年度2月には出前授業として自然の家の職員が各園に出向き、クラフトを体験した。海編山編でとった集合写真をもとに、写真立てを作成した。小浜市の保育園、幼稚園との交流は、7月の指導者研に始まり、2月の出前授業まで3～4回の交流を行った。次年度は、園付きの職員を固定して、園児の変容を調べることや過去2年にわたって行ってきた指導者研を初級と上級に分けるなど、持続可能なスタイルを視野に入れる必要がある。

5 成果と課題



前年度は、小1プロブレムについて、年長園児にどのようなアプローチを行えば、スムーズに小学校へ移行できるかを自然体験の観点から考えることを主とした。しかし、小学校入学に伴う問題としてではなく、幼児に自然体験が不足していて、その指導者が自然体験を引き出しとして持ち得ていないという現状では、小学校云々の前段階でのアプローチが必要であると考え、今年度は、「幼児に自然体験を」というシンプルな目標設定を行い、様々な事業を企画した。この「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進事業以外にも、子どもゆめ基金体験の風リレーションシップ事業「若狭湾！海フェスティバル」では5歳児からスノーケリングを実施した。また幼児期の運動プログラム普及事業では1月に若狭町の2園の保育園と連携して自然の家でのプログラム展開を考えている。本物に触れる自然体験が何歳から有用で、効果があるのか次年度以降も検証していきたい。

大学等専門研究機関との連携

国立妙高青少年自然の家 National Myoko Youth Outdoor Learning Center

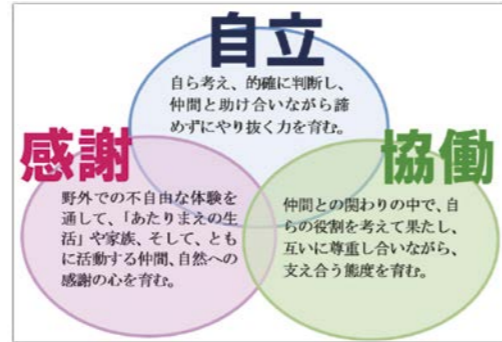
MYOKOチャレンジ2016

～自分の足で歩く
100kmトレイルへの
挑戦～

1 事業の概要・目的

本事業は、「統合型長期移動チャレンジキャンプ」である。一般募集の子供たちと発達障害・いじめ・不登校など様々な課題を抱える子供たちが一緒に参加する12泊13日間のキャンプで、徒歩による移動とテント泊と野外炊事を繰り返す。フィールドは信越トレイル(全長80km)と、妙高戸隠連山国立公園の一部である野尻湖・笹ヶ峰・火打山・妙高山である。参加者は、小学校5年生～中学校1年生の18名(男子13名・女子5名)である。子供たちは、6人1組のグループでこの100kmを徒歩で移動しながら、困難な場面を乗り越えていく。

目的は「社会を生き抜く力」の育成である。社会を生き抜く力とは、第2期教育振興基本計画(平成25～29年)で示され、この基本計画を踏まえて機構が作成した「新・機構元気プラン」をベースに計画実施している。また本事業では、「社会を生き抜く力」を「自立」「協働」「感謝」として捉え、右図の3つを具体的なねらいとしている。



(第2期教育振興基本計画 (1)社会を生き抜く力の育成 抜粋)

- 個人や社会の多様性を尊重しつつ、幅広い知識・教養と柔軟な思考力に基づいて新しい価値を想像したり、他者と協働したりする能力等が求められる。
- 学習者自身が、生涯にわたり、自身に必要な知識や能力を認識し、身に付け、他者との関わり合いや実生活の中で応用し、実践できるような主体的・能動的な力が求められている。
- 諦めることなく、状況を主体的かつ的確に判断し臨機応変に行動する力やコミュニケーション能力などの必要性がある。(東日本大震災の教訓)
- 社会性や規範意識、生命の尊重、他者への思いやりなど、子供の豊かな人間性を育てていくことが必要。
- 自己肯定感や社会性・規範意識などは学校教育における学習を基礎としつつも、多様な人々との協働、異質な価値観・文化との接触、実生活上の成功体験・失敗体験など様々な体験において育まれる。

2 活動内容

月	日	曜	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00			
準備のステージ	7	9	土						スタッフ事前研修会①	昼食	受付	全体会①	アンケート 藤巻山ハイキング 保護者説明会・面談	テント設置 練習	入室	夕食	全体会② 持ち物 服装について	入浴	就寝		
	7	10	日	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	野外炊事(第2野外炊事場)	全体会③	スタッフ事前 研修会②	片付け 準備									
	7	29	金																		
出会いのステージ	7	30	土						スタッフ事前研修会④	受付	開会式	移動 火打山・妙高を見て移動	ミーティング 約束・ゼーイング	夕食準備	夕食	ミーティング バックアップ	入浴	就寝			
	8	1	日	朝食	準備	準備	準備	準備	松之山登山口～天永山 <信越トレイルスタート> 天永山～深坂峠(約6km)	昼食		深坂峠～伏野峠(約9km)	話し合い 話し合い	移動	テント 設置	入浴	夕食	準備	就寝		
	8	2	月	朝食	準備	準備	準備	準備	伏野峠～牧峠 (約8km)	昼食		牧峠～間田峠(約6km)	話し合い 話し合い	移動	テント 設置	夕食準備 交代でシャワー	夕食	準備	就寝		
	8	3	火	朝食	準備	準備	準備	準備	自由時間	昼食作り	移動	ミーティング (星のふるさと館)	望遠鏡 (ドーム)	プラナタリウム 15:00～16:15	入浴・夕食	移動	準備	就寝			
協力のステージ	8	4	水	朝食	準備	準備	準備	準備	光ヶ原キャンプ場～間田峠～鍋倉山 (約5km)	昼食		鍋倉山～山ノ峰登山口～とん平 (約7km)	話し合い 話し合い	移動	入浴	夕食	準備	就寝			
	8	5	木	朝食	準備	準備	準備	準備	とん平～山ノ峰登山口～黒岩山 (約7km)	昼食		黒岩山～湯井 (約7km)	話し合い 話し合い	移動	テント 設置	入浴	夕食準備	夕食	準備	就寝	
	8	6	金	朝食	準備	準備	準備	準備	ラフティングチャレンジ	入浴	移動	ミーティング	夕食準備	夕食	準備	就寝					
自立のステージ	8	7	土	朝食	準備	準備	準備	準備	湯井～希望湖 (約8km)	昼食		希望湖～赤池 (約5km)	話し合い 話し合い	移動	テント 設置	入浴	夕食準備	夕食	準備	就寝	
	8	8	日	朝食	準備	準備	準備	準備	赤池～万葉峠 (約6km)	昼食		万葉峠～野尻山山頂 <信越トレイルゴール> 野尻山山頂～チロル(6km)	話し合い 話し合い	移動	入浴	移動	夕食準備	夕食	準備	就寝	
	8	9	月	朝食	準備	準備	準備	準備	バナナボート	昼食	移動	入浴	移動	テント 設置	ミーティング 荷運び	夕食準備	夕食	準備	就寝		
挑戦のステージ	8	10	火	朝食	準備	準備	準備	準備	火打山・妙高山チャレンジ① 笹ヶ峰～高谷池ヒュッテ	話し合い	昼食	高谷池ヒュッテ～火打山	話し合い 話し合い	移動	テント 設置	入浴	夕食準備	夕食	準備	就寝	
	8	11	水	朝食	準備	準備	準備	準備	火打山・妙高山チャレンジ② 高谷池ヒュッテ～妙高山～高湯温泉	話し合い	昼食			話し合い 話し合い	移動	テント 設置	ミーティング	夕食準備	夕食	準備	就寝
	8	12	木	朝食	準備	準備	準備	準備	後片付け	子供まとも 保護者面談	閉会式	スタッフ 打合せ	片付け								

3 自立を促すための手立て

(1)本事業における「自立」

本事業では、自立を「自ら考え、的確に判断し、仲間と助け合いながら諦めずにやり抜く力」とした。「自立」とは自分一人の力では獲得することができず、他者や集団との関わり合いの中で育まれていくものである。よって、「自立」「協働」「感謝」は、互いに重なり合いながらそれぞれが育成されると考える。

(2)自立のための手立て

「社会を生き抜く力」の育成のために、「プログラム」と「手立て」を講じている。プログラムと、どの手立てが有効だったのかを検討していく。

①プログラム

プログラムは5つのステージを設定し、ステージごとにねらいを明確にすることによって、子供たちがねらいを意識して活動に取り組み、段階的に成長を感じられるようにしている。活動自体は「歩く」「食事をつくる」「テントを設営する」が主であり、各ステージに合わせて徐々に子供たちの力で活動できるようにしている。どのステージでも同じ活動が繰り返されるため、子供たちは自分の力でできることが増えてたり上手になったりして成長を実感することができる。

②MYOKOチャレンジの特徴「歩く」

妙高のこれまでの長期キャンプとの大きな違いは、「どのステージでも活動が変わらない」点である。つまり、どのステージでも「歩く」ことで、子供自身が自分の歩きとグループの成長を感じ、大きな自信を得ることができる。「歩く」に注目した各ステージの活動内容を示した(表1)。ステージが進み「自立のステージ」になると、子供たちが主体となって活動する。このステージでは、複雑なルートを自分たちで確認しながら進む。その中で、自分の考えを伝え、仲間と話し合い、合意形成しながら前へ進む。ルートを間違えた時、スタッフは介入せず間違いに気づくまで見守る。このステージを終える頃になると、子供たちは自分たちの成長に気付く。



<表1 歩く活動の各ステージの設定>

	強度・難易度	
準備のステージ	中・低	2時間程度のトレッキング。参加者の特性や歩きの観察をし、グループ編成の参考にする。
出会いのステージ	強・低	距離が長く、アップダウンのあるルート。カウンセラーがグループをリードし、歩き方、休憩の取り方などを教えていく。
協力のステージ	中・中	距離、アップダウンもそれほどない。コースも複雑ではない。子供が地図を見ながら歩く。スタッフは見守りながら、必要に応じて声掛けをする。徐々に子供たちが主体となり、コース、休憩のタイミング、先頭を誰が歩くか、必要な役割分担を決めていく。
自立のステージ	中・高	距離、アップダウンもそれほどないがコースが複雑なところがあり、最後に長い上り坂がある。子供たちは自立を意識してグループの力で歩く。スタッフは安全面の確保のための声掛けはするが、コースを間違っても見守り、子供たちが気づき、解決していくのを見守る。
挑戦のステージ	強・高	距離が長く、危険な場所があるなど難易度が高いルートである。基本的には、子供たちが主体となって歩き、危険な場所は適切にスタッフが介入する。

また、「歩く」中で様々な場面がある。歩きながら、「会話する」「ゲームをする」「無言の時間」などである。この無言の時間で、キャンプのこと、自分のこと、家族のこと、学校のことなど、子供たちは様々なことを考え、自分と向き合い「内省」しているとされる。この考える時間を積み重ねることが「自立」を促していると考えられる。

③子供たち同士が対等な関係になる

グループ編成は、事前調査と事前キャンプを参考に決定している。キャンプ中はリーダーを決めていない。年長者だからリーダーという雰囲気になる時もあるが、実態としてはどのグループも対等な関係性が築かれ、リーダーシップをとる子供が目立つ場面はない。このような集団になる要因として次の点が考えられる。①新しい集団の中で24時間一緒に過ごす中で自分を出していること、②目標を達成するための話し合い(ビーイング)で、自分の意見を言える環境と本音を出し合う中でグループへの所属感が高まっていくこと、③6人という小集団の中で、それぞれの役割が明確になっていくこと、④カウンセラー2名が適切に関わっていること、などである。この対等な関係の中で、一人一人が認められ、安心して活動することができ、望ましい集団が作られていく。このような関係の中でグループの一員として役割を果たし、仲間と助け合いながら生活していくことが「自立」を促していると考えられる。



*ビーイング

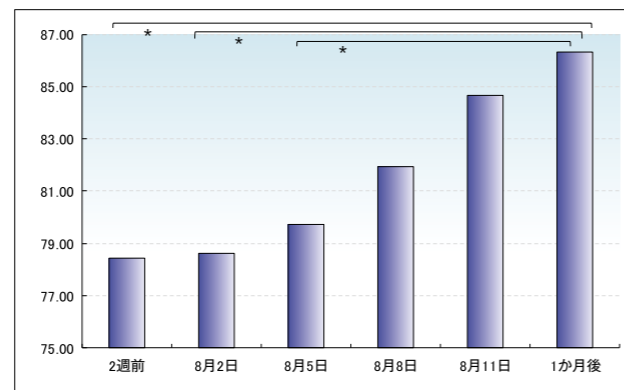
グループの目標、目標を達成するために大切にしていけること、必要のないことを決めて用紙(布)に記入する。活動の前後に確認し、必要に応じて追加記入していく。ビーイングは歩く時にも持ち運び、必要に応じて目標を確認しながら話し合いをする。

4 評価・考察

(1)リーダーシップ尺度による分析

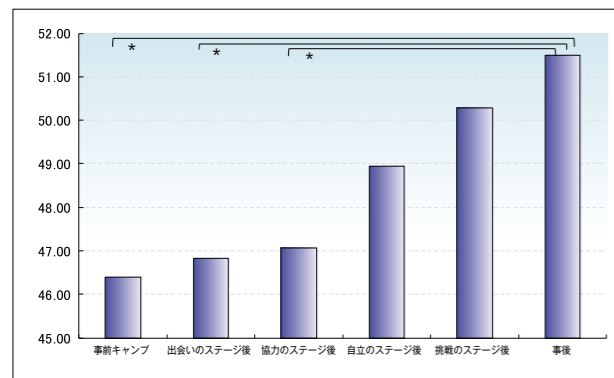
参加者18名に6回の調査を実施し、1要因被験内計画による分散分析を実施した。その結果、時期の主効果が1%水準で有意 ($F(17,85) = 4.50, P < .01$) であった。

本事業を通して、参加した子供たちの5つの力(リーダーシップ尺度中位指標)「困難に自ら立ち向かおうとする力」「計画的に考え行動する力」「情報を収集し、想像力をもって課題を解決しようとする力」「役割を意識し、集団の規範を守る力」「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」が伸びたことが言える。



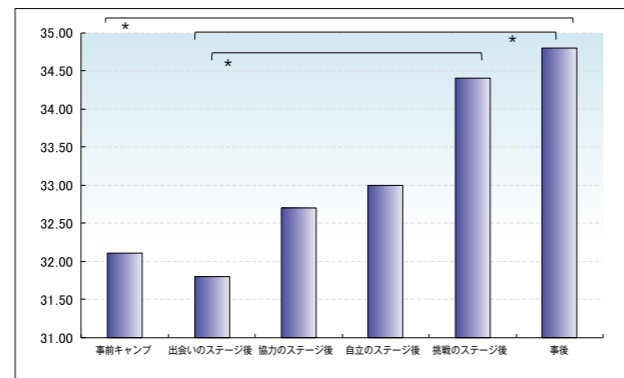
+p<.10 *p<.05 **p<.01

図1 「リーダーシップ」得点の平均の変化



+p<.10 *p<.05 **p<.01

図2 「課題達成機能」得点の平均の変化
集団全体で何らかの目標を定めて、その目標に向かって成員を動機づけ、目標を達成させる機能



+p<.10 *p<.05 **p<.01

図3 「集団維持機能」得点の平均の変化
集団のメンバー同士のコミュニケーションを円滑にさせ、人間関係を良好にし、結束させる機能

(2) 考察

リーダーシップ尺度の中位指標で顕著な結果を得られた『計画的に考え行動する力』『役割を意識し、集団の規範を守る力』について考察する。また、本事業の1か月後に実施した保護者アンケートの記述から、参加した子供たちのキャンプ後の様子と合わせて考察する。

『計画的に考え行動する力』では、キャンプ後に「土日に遊びに行く予定がある時、朝早く起きて宿題を全て終わらせている」「時間を意識して計画を立てるようになった」「何かを準備する時に、行動の流れを予想してもしもの場面も考えて自分で準備している」(保護者アンケート記述より)などの変容がみられる。キャンプ生活の中で、何度も荷物やテントをまとめたり、地図を見ながらトレッキングのルートを確認したりして、先を見通して計画的に行動したり、自分で考えて行動することができるようになったと考えられる。

『役割を意識し、集団の規範を守る力』では、キャンプ後に「学校の行事でルールを守ったり、守っていない仲間呼びかけをしたりしている」「学校や地域のために活動する」(保護者アンケート記述より)など自分の所属する集団のために行動している様子が伺える。キャンプ中に、ビーイングを中心に自分たちの班の目標を達成するためにどうすればよいかを話し合う経験が、学校生活でも生かされているのではないかと考える。

MYOKOチャレンジは、主だった活動が毎日繰り返されるため、子供自身が自分の成長を実感できるという特徴がある。子供たちはできるようになったことを持ち帰り、自分の成長に自信をもち、日常生活に戻っていったと考えられる。また、キャンプ中に得た力を日常生活に生かして、意欲的に生活していると考えられる。保護者は、キャンプ後にスタッフからキャンプ中の様子を聞いた後に子供と対面している。自宅に戻って、スタッフから聞いたことや、子供の言動から見える変化を目の当たりにして、子供の成長を認めてあげることができる。成長を親子で実感することによって良好な親子関係がキャンプ後に築かれていることが子供の「自立」を促進させたと考えられる。

上位指標	中位指標	下位指標
少年期(高学年)のリーダーシップ測定尺度	困難に自ら立ち向かおうとする力	1 意欲・自立性
		2 危機意識
	計画的に考え行動する力	3 計画・判断
		4 省察・アクション
	情報を収集し、想像力をもって課題を解決しようとする力	5 情報収集
		6 想像力
集団維持機能	役割を意識し、集団の規範を守る力	7 役割意識
		8 規範意識
	集団内の人間関係を円滑にしようとする力	9 伝達・コミュニケーション能力
		10 ユーモア・明るさ

5 成果と課題



(1) 成果

成果①「リーダーシップの5つの力をつけることができた。特に、「計画的に考え行動する力」「役割を意識し、集団の規範を守る力」をつけることができた」

成果②「子供も保護者も「子供の成長」を実感できる体験活動が「自立」を促進する」

(2) 課題

課題①歩くことを繰り返す活動による効果の検証。

課題②子供たち同士の対等な関係性がどのように作られていくのかを検証。

課題③子供たちの主体的な活動場面を作り、子供たちが「自立」を実感できるようなプログラムを検討していく。



大学・地域の小学校との連携

国立乗鞍青少年交流の家 National Norikura Youth Friendship Center

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー(大学生)

1 事業の概要・目的

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナーは平成11年度からスタートして18年目となる。本事業は、自然体験活動の理論や技術を学習するとともに、小学校の自然体験活動プログラムの企画及びボランティア体験活動に参加することで子どもたちに自然体験活動の楽しさや喜びを伝えることができる青年の育成を図る事をねらいとしている。また、所定の単位を取得した参加者には法人ボランティアの資格をあたえている。

全日程は6日間で実施しており、2日間の講義終了後は、平成10年度から高山市の全小学校において実施している3泊程度の自然体験活動「セカンドスクール」の活動支援ボランティアとして実習をおこなうことになる。

事業は9月、10月と2回実施しており、1回目の参加者は、大学の単位取得の一部として参加する大学1年生が多く、2回目は、教育実習を終えた後の大学生が主体となる。そのため、1回目のセミナーでは、技能の習得はもちろんのこと、子どもと教員への対応を学ぶ必要がある。また、2回目の参加者は、教育実習や過去の青少年教育施設での指導経験を踏まえ、子どもに自然の楽しさを実感させたいという願いを抱いて参加することが多いことから専門的指導技術を学ぶことが必要となる。さらに、参加者がセカンドスクールで指導実践の場をもてることは、大学生にとって社会で生き抜く力をつける絶好の機会となっている。乗鞍の職員は、青少年育成の観点に立ったプログラム構成と参加者の指導に心がけている。



野外炊飯(カレー作り)に向けて何度も練習をして本番に向かった。

2 活動内容

参加者はセミナーや講義に参加 参加者は各学校の活動に参加

1日目	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
								受付 12:10~	開講式	【講義】 体験活動の意義と 青少年教育施設の 役割(機能) 1.5	入所 OR	夕食 入浴		【講義】自然体験活動 リーダーボランティアに 求められるもの 0.5 【実習】安全対策と 危険回避 2.0	翌日 準備		就寝
2日目	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
	起床 朝のついで 清掃 朝食		【講義】 発達段階に応じた 体験活動の 必要性と 教育課程 1.5		【講義・実習】 野外炊飯の 基礎技術と指導法 2.0 ・安全対策 1.0			【講義・演習】 ボランティア活動の心構えと青少年 教育施設における活動内容 【フィールド調査含む】 (意義 1.0+理解 1.5)	夕飯の ついで	夕食 入浴			【実習】 プログラム企画と 準備 2.0	翌日 準備		就寝	
3日目	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
	起床 朝のついで 清掃 朝食		開校式 セカンド スクール	【実習】 プログラム 指導	昼食		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	担任 との 打ち合せ	夕飯の ついで	【実習】 児童の 生活指導 (夕食・入浴)		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)		【実習】 反省会			就寝
6日目	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
	起床 朝のついで 清掃 朝食		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	開校式 セカンド スクール	昼食			ふり返り 閉講式									

3 自立を促すための手立て

(1)自立を促すためのよりよいプログラムのあり方(上記の資料「活動内容」参照)

プログラムは、大きく分けて2つである。「セミナーや講義への参加」と「各学校の活動への参加」である。

講義では、体験活動の意義や必要性についての知識を学び、安全対策や危機回避についての技術を身につけることになる。また、学校から野外炊事やネイチャーゲームの時間の指導を任せられることもあるので子どもたちにきちんと指導できるように指導方法を繰り返し練習したり、指導で使う資料を準備したりする。そして、指導当日をむかえる。

出合いの自己紹介から始まり、活動時間、食事時間、集い、そして、お別れの会までは一緒に生活することになる。

(2)担当する学校の先生との調整会議の位置付け

学生たちにとって自信が持てる瞬間は、子どもたちとの関わりの中で数多い成功体験ができることだと考えられる。「先生の薪割りの話、よくわかったよ。」「先生のアドバイスのおかげで、大ケガもなくおいしいカレーが出来上がったよ。」「先生はいつも笑顔で接し

てくれたね。」など、子どもたちから最高の贈り物をもってほしい。そんな贈り物を手に入れるためには、子どもたちをよく知っている担任の先生との打ち合わせが不可欠である。学校のねらいや担任の先生の願い、子どもたちの様子を知るために入所前、入所してからの毎晩、打ち合わせ会議を位置付けた。

(3)担当専門職の位置づけや相談コーナー

学校につく学生たちの数は、学級数を見て調整している。複数の学生で担当している学校は相談できる仲間がいるが、小規模校には一人で入ることもあり不安が募る。その時に相談相手になるのが担当専門職である。入所した時から我が子を社会に送り出す気持ちで学生に寄り添いアドバイスの言葉を送る。学年の違いはもちろんのこと、参加動機やモチベーションもそれぞれである。活動を共にする中で人生の相談相手になれば最高である。

4 評価・考察

今年度は、「自己肯定意識尺度」アンケート41項目をとって大学生の自己意識の発達を調査することにした。本尺度は、「対自己領域」と「対他者領域」の2つに分けて測定するものである。また、アンケートはこの事業に参加した大学生と参加していない大学生に、事業参加前と事業参加後の2回アンケートをとって結果をみることにした。

下記の結果から、明らかに事業に参加した学生には、事前から事後のアンケートに変化が見られる。特に、対自己領域の数値に大きな変化が見られ、閉会式時に向けて有意に向上していることがわかる。

これらの結果から、今回の事業で「大学生の社会への自立を育てることができた」といえる。青年中期といわれる大学生は、親の保護から社会へ参画・貢献し、自立した大人となるための最終的な移行時期である。大人の社会でどのように生きるのかという課題に対して、真剣に模索する時期である。大学受験を終えて大学生活を満喫しつつも講義や部活動、アルバイトに走り回っている。そんな中でこの事業に参加することは、とても重要な体験であったといえる。さらに自分の夢を追い続ける自信とし、大学生生活をより充実したものにしてほしい。

表1:自己肯定意識尺度アンケート41項目(1.対自己領域①~⑱ 2.対他者領域⑳~㉿)

1. 対自己領域		2. 対他者領域	
1	自分なりの個性を大切にしている	20	他人との間に壁をつくっている
2	私には私なりの人生があつていいと思う	21	人間関係をわずらわしいと感じる
3	自分のよいところも悪いところありのままに認めることができる。	22	自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする
4	自分の個性を素直に受け入れている	23	自分はひとりぼっちだと感じる
5	自分の夢をかなえようと思つて燃えている	24	私は、人を信用していない
6	情熱をもって何かに取り組んでいる。	25	友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい
7	前向きな姿勢で物事に取り組んでいる	26	友人と話していても全然通じないので絶望している
8	自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている	27	他人に対して好意的になれない
9	張り合いがあり、やる気が出ている	28	相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる
10	●本当に自分がやりたいことが何なのかわからない	29	自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている
11	●自分には目標というものが無い	30	疑問だと感じたらそれらを堂々といえる
12	生活がすごく楽しいと感じる。	31	自己表明・対人的積極性
13	わだかまりがなく、スカッとしている	32	友だちと真剣に話し合う
14	充実感を感じる。	33	人前でもありのままの自分を出せる
15	精神的に楽な気分である	34	自主的に友人に話しかけていく
16	自分の好きなことがやれていると思える	35	人前でもありのままの自分を出せる
17	自分はこのびのびと生きていると感じる	36	他人から何か言われないう、変な目で見られないかと気にしている
18	●満足感がもてない	37	人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている
19	●心から楽しいと思える日がない	38	自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる
	●は逆転項目	39	他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている
		40	無理して人に合わせようとして窮屈な思いをしている
		41	自分は他人より劣っているか優れているかを気にしている
			人に気がつかないでつつかれる

図1:自己肯定意識尺度アンケート結果

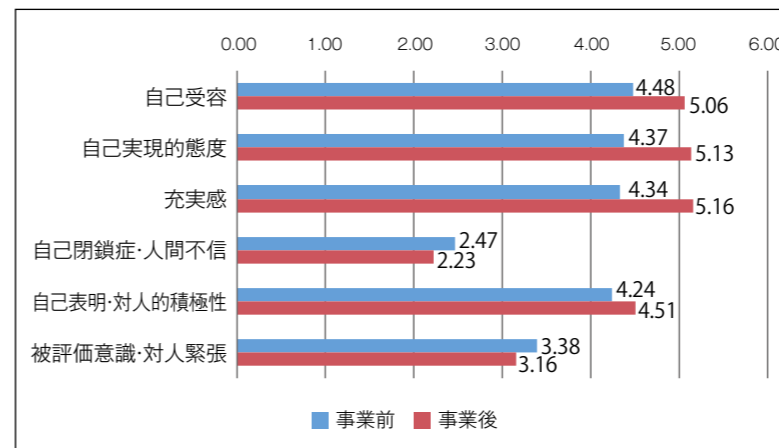
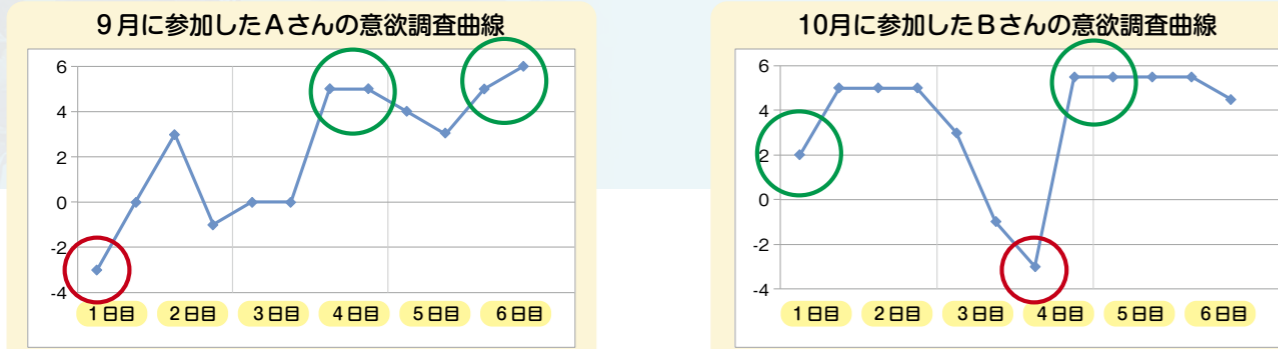


図2 参加学生の意欲調査曲線



9月に参加していた学生(Aさん)の意欲調査曲線と10月に参加していた学生(Bさん)の意欲調査曲線は顕著に心情が表れている。どちらの学生も5日目・6日目には最大値の6に近づいているが、グラフの変化はずいぶん違う。

学生たちとの会話や様子、振り返り用紙と意欲調査曲線を照らし合わせてみると、一人一人の学生たちが個々の課題を乗り越えながら最終日を迎えたことがよくわかる。

9月に参加したAさんについて

Aさんは、初日「正直参加の理由は、単位取得のためです。」と語っていた。Aさんに限らず参加の理由をそのように答えた学生は多い。また、知らない場所で知らない仲間と不安を抱えながら事業に参加していたのが資料3からもよくわかる。講義への集中力も高まらず落ち着かない様子であった。しかし、初日の夜のアイスブレイクや暖炉の間での語り合い、翌日の楽しいカレー作りによって頑張ってみようかな…という思いが芽生えている。2日目の夜の意欲ダウンは、夕方の学校の先生との打ち合わせ会議が予想される。学校の願いや期待されている言葉を聞いて自分に本当にできるのかと振り返っている。これは不安感の表れでもあるが適度な緊張感とやるべきことへの決心のように感じられた。3日目は、本番に備えて野外炊事のリハーサルを何度も行った。4日目は、いよいよ子供たちとの出会い。無事に野外炊事の説明を済ませ大きな怪我もなくやりきった気持ちが表れている。また、子供たちとの関わりに充実感を感じている様子が何度も見られた。5日目の夜は、学校との反省会の中で褒めていただいたこと、逆に考えさせられるお話もしていただいた。6日はいよいよ最終日。午前中は一緒にハイキングに出かけた。最高の天気であった。午後からのお別れ会では、お礼の合唱、ソーラン節、子供たちからの感謝の言葉に涙を浮かべていた。子供たちに囲まれている時のAさんの表情は最高であった。最初は不安でいっぱいであったと思うが、Aさんが子供たちに一生懸命話をしている姿からは、自立心が強く生まれているように見えた。

～Aさんの感想より～

最初はとにかく不安で仕方がありませんでした。2日目には、野外炊事の実習でとてもおいしくカレー作りができてうれしかったです。しかし、それを子供たちに教えるとなるとまた不安と緊張感でいっぱいになっている自分がありました。子供たちに出会ってからは時間が経つのがとても早く大変でしたが楽しい時間でした。子供たちが真剣にソーラン節をする姿には感動しました。



1日目の夜
みんなで
アイスブレイク

10月に参加したBさんについて

Bさんのこの事業への参加理由は、「1年次にこの事業に参加してとても楽しくて充実していたのでもう一度経験したかったからです」と語った。教育実習も終え、教員採用試験にも挑戦し、やる気に満ち溢れていた。講師には、意識が高い教員の卵であると評価していただいた。図2からも読み取れる。2日目は、久しぶりの野外炊事を楽しみ、おいしいカレーができて大満足!続いて最高の星空観察ができ感動いっぱいの様子であった。3日目は、本番に備えて何回も野外炊事の説明のリハーサルを行った。何度も練習することで自信を付けているのがわかるが、やはりうまくできるか心配な様子。また、Bさんの学校は1泊2日の宿泊研修の為、入所が1日後となる。そのため、他の学生のところには児童たちが入所して慌ただしく頑張っているのが羨ましくて仕方がないと語っていた。4日目は意欲ダウンとなっている。また教員採用試験2次発表前で落ち着かない様子でもあった。

採用試験2次合格決定!5日目6日目に突入!子供たちとの出会い!カレー作りの説明大成功!星空のお話タイムも無事終了!また、クラフト作りや食事の時間を子供たちと一緒に楽しく過ごすことで笑顔いっぱいの様子であった。いよいよ最終日。お別れ会では、自分の素直な気持ちを子供たちに堂々と伝えていた。また、一人一人の子供たちときちんと向き合い最後のお別れをしていた。今回担当した学校は、小規模校であり大きな問題や課題を持つ子もほとんどいなかった。しかし4月からの現場では心して向かいたいと語った。

～Bさんの感想より～

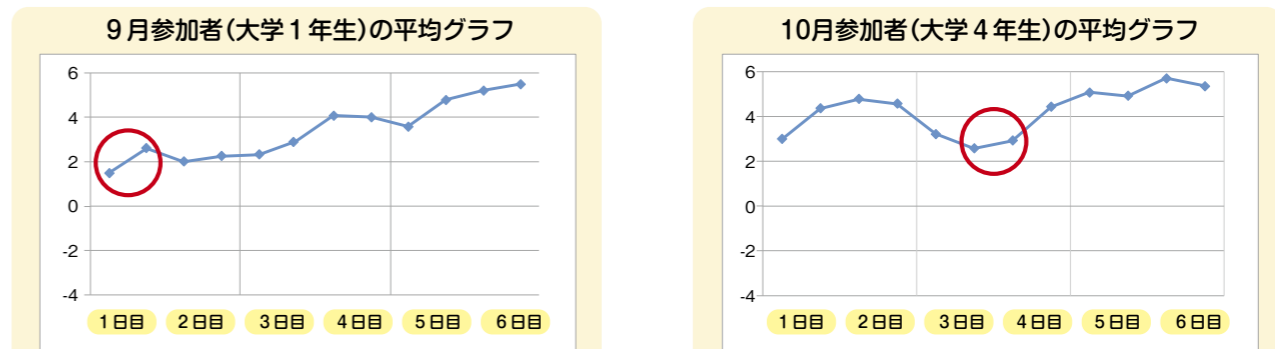
3年ぶりに乗鞍に来ることができて本当によかったです。3年前の感動を求めてやってきました。3年前の講義とはまた違い勉強になりました。講義だけでなく実際に実習があるのは自分たちの力になります。学校の先生方にもずいぶんお世話になりました。今は、自分にもってできることがあったのではないかと…という気持ちになっています。

乗鞍で学んだことを4月から現場で生かしていきたいです。ありがとうございました。



最終日……
子供たちとの
さみしい別れ

図3 意欲調査曲線の9月と10月の平均グラフ



9月と10月のプログラム内容はほぼ同じであるがずいぶん違う曲線になっている。担当職員の見取り用紙と照らし合わせてみると9月の参加者である1年生は単位取得のための参加であり不安な様子が見られ元気がない。しかし、カレー作りの練習や準備段階の中でずいぶん笑顔が見られるようになってきた。また、子供たちに出会ってからは自発的に動き、夜はグッタリと疲れていた。最終日は、感動のあまり涙する学生がたくさんいた。10月の参加者である大学4年生は、やる気に燃え笑顔で参加してきた。しかし、3～4日目に見られる意欲ダウンは、翌日の指導場面でより良い説明ができるだろうか…と不安に感じていたために表れた変化であろう。より良い指導を目指す意識の形成であるといえる。



10月:講義の中では、涙ながらも講師と語り合う場面も見られた。

5 成果と課題



○プログラムの位置づけ方は有効であった。

大学生を対象にした調査研究は、昨年スタートして2年目となる。昨年から大きく変更した部分はないが、6日間の事業を前半は「セミナーや講義への参加」、後半は「各学校の活動への参加」という位置づけは学生にとって不安を解消させ、自信を持って子どもたちの前に立てるプログラムになっていることがわかる。準備段階では、子どもたちの前に立つ前に学生同士で見合いお互いにアドバイスをしあうことで自信をつけ、子どもたちの前では大きな声で堂々と語り、たくさんの成功体験をしている姿がたくさん見られた。

～参加者の振り返りの感想より～

どんな1週間になるのかとても不安でしたが、最初は体験活動の意義や発達段階に応じた体験活動の必要性について講義で学んでから実習に入ったので、スムーズに進めることができました。講義の内容もとても分かりやすく深い内容で考えさせられました。また、子どもたちの前に立つ前に、事前実習や仲間同士の練習会があり、自信をもって子どもたちの前に立つことができました。そう振り返ると、やはり1週間は必要であることが実感できました。

○担当する学校の先生との打ち合わせ会議は学生たちの安心感につながった。

学校が入所する前日に、担任の先生から具体的な話を聞き、自分たちに期待していることをきちんとお願いされた後の学生たちは、不安をとっ払ってスッキリしたように見えた。また(子どもたちへの関わり方はこれでよいのか…)(説明の仕方はあれでよかったのか…)と心配している中、夜の反省会で褒めていただいたり、アドバイスをいただいたりすることは、翌日への大きなエネルギーと安心感につながっていた。

○乗鞍の職員だれもが学生を支える雰囲気づくりを大切にしたい。

学校と学生たちをコーディネートする企画指導専門職は限られた時間の中で積極的にコミュニケーションをとることに心がけた。また、失敗することを恐れず「大丈夫やってみよう!失敗したら一緒に学校に謝ろう!」と共に頑張っていることをアピール。また、乗鞍のみんなが応援している雰囲気を大切に臨むことができた。

●大学生事情で参加募集が難しくなっていることが実に残念である。大学側との連携が必要である。



児童養護施設との連携

国立能登青少年交流の家 National Noto Youth Friendship Center

能登宿泊体験合宿



1 事業の概要

児童養護施設で過ごす子供6名と児童養護施設職員6名を対象に、2泊3日のキャンプを実施した。昨年に引き続き2年目の事業である。児童養護施設では、普段、一人の職員が複数の児童と関わっている。本事業では、児童養護施設職員がより良い信頼関係を築きたい子供とそれぞれペアとなり、3日間、就寝を含め常に行動を共にする。

2 事業のねらい

職員と子供一人ずつのペアでの活動を繰り返すことで、信頼関係を築く。また、日頃、児童養護施設職員は、子供たちの自己肯定感の低さを感じている。そこで、子供とのペアでの活動を繰り返すことで互いをよく知り、信頼関係を築くとともに、2日目には、1日サイクリングを実施し、体力や興味関心に応じて距離や内容を職員と子供が相談して決め、楽しみながら体力への挑戦をすることで達成感を味わわせる。これらのことを通して、自己肯定感を高めることを目指す。

3 活動内容

<期 日> 平成28年10月8日(土)~10日(月)2泊3日

<参加者> 12名

学年	小2	小3	小5	小6	職員	合計
男子	1	0	1	2	4	8
女子	0	1	1	0	2	4

<日 程>

一日目	OR 昼食	サイクリング 練習 13:30~ 15:30	そば打ち体験 15:30~ 18:30	入浴	星座観察 19:20~ 21:00	入浴	就寝 22:00	スタッフ MT
-----	----------	---------------------------------	---------------------------	----	-------------------------	----	-------------	------------

二日目	サイクリング		入浴・夕食	ふりかえり (キャンドル) 20:00~ 21:00	入浴	就寝 22:00	スタッフ MT
	交流の家→妙浄寺→ころ柿の里しか→高山右近の碑→ いこいの村能登半島(昼食弁当)→アリス館志賀→交流の家						
	交流の家→柴垣海岸で砂像作り・貝拾い(昼食弁当)→ 妙浄寺→交流の家	貝殻クラフト					
	交流の家→滝港で釣り(昼食弁当)→交流の家	釣った魚を調理					
	交流の家→コスモアイル羽咋(昼食弁当)→吉崎・次場弥生公園→ 気多大社→交流の家						
交流の家→千里浜で遊び・ホットサンド作り→交流の家							
交流の家→気多大社→千里浜で貝拾い(昼食弁当)→交流の家	貝殻クラフト						

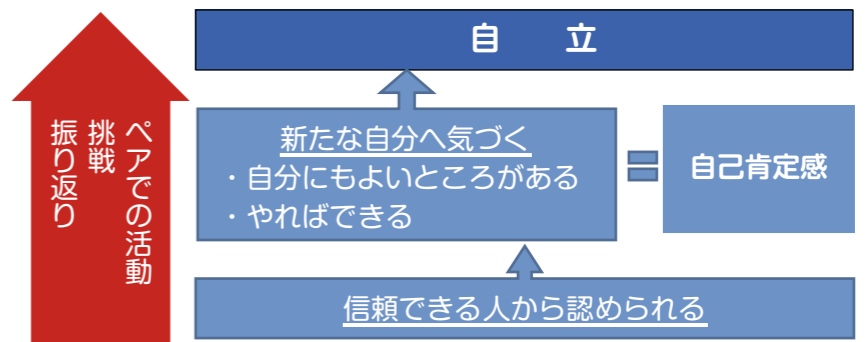
三日目	宿舎等 清掃	朝 食	大社焼き (手びねり) 9:30~11:40	アンケート	外食体験 12:30~ 13:00
-----	-----------	--------	------------------------------	-------	-------------------------

「表中の用語」
MT…ミーティング、打ち合わせ
OR…施設の使い方
オリエンテーション

4 自立を促すための手立て

信頼できる人から認められる経験を積み重ねることで自己肯定感が高まる。児童養護施設の児童にとって、自分を担当する児童養護施設職員との信頼関係を深めることが大切である。

さらに、挑戦することを通して達成感が生まれ、新たな自分へ気づき、自己肯定感へとつながる。これらのことを通して自立を促す。



(1) 児童養護施設との事前・当日・事後の連携

事前に、この事業をより有意義なものにするために、参加職員がどのような願いをもって参加するかを紙面でまとめてもらった。事業1日目と2日目には、夜に児童養護施設職員との振り返りを行い、子供の様子やプログラムの効果を取り上げた。約1か月後、子供の変容を聞き取ることで、能登宿泊体験合宿をきっかけとして、子供の自立を促していくための関わり方について確認した。

(2) 体験プログラムの工夫

【信頼関係を深めるペアでの活動】

ペアでの活動の時間をたっぷりと保障し、子どもと施設職員との信頼関係を深めることをねらいとした。活動の中では、自然と会話が生まれ、力を合わせたり相手を思いやったりすることが増えた。

① そば打ち体験

じっくりと2人で向き合い、力を合わせてそばを完成させるようにした。

② 星座観察

望遠鏡を覗きながら、惑星・恒星を見たり、星座を2人で見つけたりすることで、昼間とは異なる雰囲気の中で信頼関係が深まるように期待した。当日は天候不順のため、星座観察ではなく、プロジェクターで夜空や星雲等の写真を見ることとなった。



③ 大社焼き(陶芸)

大社焼きは、個々に作品を作る。落ち着いて土をこね、一つの作品を作り上げる中で、児童養護施設職員と子供が互いに褒めたり、アドバイスしたりできる。また、出来上がった作品は、1か月後に焼き上がる。その作品を見て、この充実した事業を思い出すことを期待した。

【新たな自分へ気づく・振り返る活動】

① サイクリング

サイクリングは、挑戦する活動である。事前にペアでコースを考えた。内容は、サイクリングと他にやってみよう活動を追加したもので、釣り・貝殻拾い・社寺の見学・近隣の名所巡り等である。活動の際には、子供一人一人のめあてをはっきりさせてスタートした。交流の家職員の支援は、迷いやすいコースの道案内と昼食、自転車トラブルの対応等、要所で支援をした。



② キャンドルセレモニー

サイクリングに出発する時に決めためあてについて振り返るとともに、それぞれの頑張りを参加者全員で認め合う場として、キャンドルセレモニーを位置付けた。児童養護施設の職員には、子供のがんばりを中心に発表するよう依頼した。参加者は自分の思いを言葉にし、他者の思いを聴く。交流の家職員がそれを価値づけ、一人一人が自信をもつ場になればよいと考えた。



5 結果と考察

結果

表1は、参加者6名の子供に事業前、事業後、事業1か月後に自己肯定感に関する調査をし、1要因被験者内分散分析を行った結果である。

事業前と事業後、事業前と1か月後に5%水準で有意であった。特に「勉強が得意になりたい」では、事業前と事業後、事業前と1か月後に5%水準で有意であった。「学校以外の友達を増やしたい」では、事業前と1か月後に5%水準で有意であった。「自分らしさをもちたい」では、事業前と事業後に5%水準で有意であった。

表1 事業前・後、1か月後の自己肯定感の比較

	事業前		事業後		事業1か月後		F
	M	SD	M	SD	M	SD	
①学校の友達を増やしたい	2.833	0.898	4.000	0.000	3.333	1.106	2.400
②学校以外の友達を増やしたい	1.500	1.118	2.833	1.213	3.167	1.067	5.830 *
③勉強が得意になりたい	1.667	0.943	3.333	1.106	3.500	0.764	9.740 *
④今の自分を好きになりたい	1.833	0.687	2.333	1.106	2.500	1.118	0.840
⑤自分らしさをもちたい	2.500	0.764	3.667	0.471	3.000	0.577	6.380 *
⑥体力に自信をもちたい	3.500	0.764	4.000	0.000	3.667	0.745	0.740
合計	13.833	2.911	20.167	2.794	19.167	2.734	6.800 *

*p<.05 **p<.01

表2は、参加した児童養護施設職員に事業前と事業1か月後の信頼関係について調査をし、1要因被験者内分散分析を行った結果である。

数値は、若干の向上が見られたものの、有意ではなかった。

表2 事業前・1か月後の信頼関係の比較

	事業前		事業後		t
	M	SD	M	SD	
①自分(職員)に対して思いやりのある言動・態度があること	3.333	0.471	3.500	0.500	2.400
②自分(職員)に悩みや困ったことを話すこと	2.500	0.500	2.667	0.471	5.830
③自分(職員)にあいさつをする・あいさつを返すこと	3.333	0.471	3.500	0.500	9.740
合計	9.167	1.344	9.667	1.247	2.140

考察

本事業において、事業前と比べ、事業後と1か月後において、自己肯定感の高まりを伺うことができた。特に、学習に関する項目において、1か月後も継続して高い数値を示したことは、サイクリングプログラムにより、自分の体力へ挑戦し達成感をもったことで自信につながり、学習意欲につながっていったと考える。

しかし、信頼関係においては、数値の落ち込みはなく、若干の向上に留まった。児童養護施設職員に1か月後の聞き取り調査も行ったところ、事業直後は、傍に来ること・話しかけてくること等は増えたがその後徐々に減っていき、事業前と同等とのことであった。しかし、「(児童養護施設職員に対し)以前よりわがままを言うようになった」「(児童養護施設職員の顔を見ると)笑顔が増えた」との回答があった。小学生の成長段階からすると、児童養護施設で接している大人(職員)に対しわがままを言えるということは、2人の距離が縮まり、何でも言える関係に近づいたと考えることができる。

6 参加者の様子・変容

【Aさんの様子・変容】

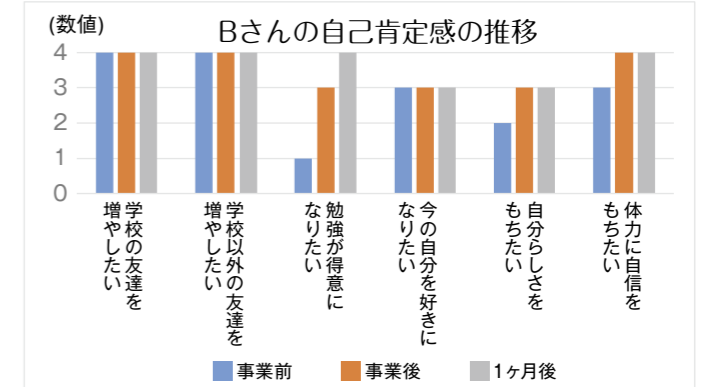
2日目のキャンドルセレモニーでは、一人一人がサイクリングプログラムについて発表した。Aさんは、サイクリングと釣りをした。Aさんは、率先して最初に発表したばかりでなく、他の人の発表が一通り終わった後もまだ話したいと、同じような内容ではあったが、楽しそうに話をした。児童養護施設職員からは、確かに楽しく活動はしたが、こんなにうれしそうに話すとは思わなかったと夜のミーティングで話していた。サイクリングで2人のときには、素直に言えなかったことが、キャンドルセレモニーの参加者全員がしっかりと聞いてくれる環境の中で素直に自分の気持ちを伝えなくなったからだと考える。また、2人での活動の時に、「釣りは楽しい」と言ったり、施設職員がサイクリング中に止まって水分補給すると、Aさんも職員に合わせて水分補給したりするなど、職員に対しての気遣いがあった。信頼関係が深まっている姿と考える。



【Bさんの様子・変容】

Bさんは、サイクリングで今回最長距離である40kmを走った。途中、激しい通り雨に遭うなど、めげそうになる場面が3度ほどあった。施設職員の「いつでも休んでいいよ」という、安心感を得ることができる言葉掛けがあり、きつい上り坂もがんばることができた。Aさんは、「サイクリングでいろいろなところに行けて楽しかった」と事業後のアンケートの自由記述で答えている。

自己肯定感を調べるアンケートでは、「勉強が得意になりたい」という項目の評価が徐々に上がっている。事業1か月後に児童養護施設職員に聞くと、学校の「学習頑張り週間」で、昨年はいいや絵本を読んだりしていたが、今年は英語に意欲をもち、簡単な英単語をCDを使って覚える学習をしたとのことであった。学習への意欲の高まりが見られる。



【Bさんと活動した児童養護施設職員の様子・変容】

Bさんと児童養護施設職員は、昨年度から引き続き参加したペアである。サイクリングプログラムでBさんを安心させた「いつでも休んでいいよ」という言葉は、昨年度にはなかったという。「自分も成長していると思う」と、その日の夜の職員ミーティングで話していた。サイクリングプログラムを事業前に児童と考える際、見通しがもてないことへの不安が大きいAさんに、「限界のその先を見せたい」と願いをもってサイクリング行程を決めたという。児童養護施設職員にとっても本事業がきっかけとなり、変容が見られる。

7 成果と課題



○児童養護施設職員と子供のペアでの活動を重ねること、挑戦をし振り返る活動を通して新たな自分へ気づくことで、自己肯定感が高まった。特に、サイクリングは、事業前から行程をペアで考えることから始めたことで、より達成感がうまれているものと考えられる。振り返りでは、担当の児童養護施設職員だけでなく、他のペアからもじっくりと話を聞いてもらえたことで、より達成感が深まったことが伺える。

○児童養護施設職員の変容が、担当する子供との関係を良好にしている。特に若い児童養護施設職員にとって、事業中の夜のミーティングや1か月後の聞き取り調査時において、子供の変化やその見取り方について価値づけやアドバイスをしたことが、変容につながったと考える。

○子供の自立をより促すために、事業に参加する児童養護施設職員との事前の打ち合わせが必要である。児童養護施設長と事前打ち合わせを行ったが、6ペア12名という少人数で行っているため、事業に参加する職員とプログラムと一緒に検討することでねらいがより明確になり、プログラムに反映できる。また、打ち合わせを通して子供の自立について一緒に考えることで、児童養護施設職員にとって、事業中だけでなく事業後についての子供との関わり方を考えるきっかけともなると考える。

児童養護施設との連携

国立立山青少年自然の家 National Tateyama Youth Outdoor Learning Center

夏のチャレンジキャンプin立山2016

1 事業の概要

富山県内には、様々な事情により親元を離れた生活を余儀なくされている子供たちのための社会福祉法人運営の児童養護施設として、「社会福祉法人 富山市社会福祉事業団 富山市立愛育園」、「社会福祉法人 ルンビニ園」、「社会福祉法人 富山県西愛育会 高岡愛育園」の3施設がある。立山青少年自然の家では、一昨年度よりこの3施設と連携を図り、相互理解・協力を深めながら事業を行い、施設の子供一人一人の自己肯定感や自己有用感を向上させるとともに、自立を促進することができる体験活動や、生活習慣の改善につながる多様な体験活動などを提供できるように努め実践してきた。

本実践のうち、特に「社会福祉法人 富山市社会福祉事業団 富山市立愛育園」と平成28年8月18日(木)～20日(土)に実施した「夏のチャレンジキャンプin立山2016」について考察する。

2 事業のねらい

- ・豊かな自然の中での野外を中心とした体験活動に仲間と共に取り組むことを通して、豊かな情操の育成や協働の楽しさ・大切さへの実感を図るとともに、自己肯定感や自己有用感の向上を目指すことで、子供一人一人の自立の促進を図る。
- ・集団生活や自然体験活動など、多様な体験を通して基本的な生活習慣を身に付け、将来、社会の一員として自立していくための基礎・基本を育む。

3 活動内容

「夏のチャレンジキャンプin立山2016」参加者 13名(小学生6名、中学生3名、高校生4名)

日程	9:30	10:00	11:30	12:00	13:00	13:30	15:30	19:00	19:15	19:45	20:00	20:30	21:30
1日目 8月18日(木)		園出発	スーパーでの食材購入	到着	昼食	入所式	森小屋づくり	野外炊事(夕食)	自由	ナイトハイク	自由	入浴	自由 就寝
2日目 8月19日(金)	6:30	7:00	10:30	12:00	13:00	15:30	16:30	19:00	19:30	20:40	20:00	20:30	21:30
	起床洗面	野外炊事(朝食)	ポイント探し	昼食(おにぎり)	ポイント探し	火起こし体験	野外炊事(夕食)	自由	キャンドルサービス	自由	入浴	自由	就寝
3日目 8月20日(土)	6:30	7:00	9:30	11:00	12:00	13:00	13:30	14:00					
	起床洗面	野外炊事(朝食)	森小屋の片付け	振り返り	昼食	自由	退所式	所出発	園到着				

4 自立を促すための手立て

昨年度、この生活・自立支援事業で、自分たちで野外炊事をするメニューを考え、必要な食材をスーパーで買い出しして、自分たちの「食」を作り上げるというプログラムを中心とした1泊2日のキャンプを実施した。施設職員と打ち合わせを行う中、今年度は、キャンプの期間を2泊3日にし、さらに子供たちの自主性が生かされる内容にしようということになった。その結果、今年度は、昨年度の「食」に加え、生活の基盤となる「住」についても自分たちの手で寝泊



まりする場をつくる「森小屋づくり」をすることにした。また、参加者がキャンプを通して自己肯定感を高め、自らよりよく生きたいという意欲を高めてくれるよう意識して支援していくことを確認した。

具体的には、①自己決定の機会をなるべく多く取るようにして、自分たちの行動を決め、決めた活動に責任をもってやり遂げることにより、自分自身の行動を決定していく力を養うように心がける。

②キャンプ中、連携施設の職員とともに、参加者の頑張りやよさをなるべく見付け、本人に伝えることにより、参加者が自らのよさに目を向け、自己肯定感を高めるように努めていくことにした。

5 評価・考察

キャンプ前後に国立青少年教育振興機構の生活自立支援事業のアンケートを実施した。自立的行動習慣と自己肯定感の平均値を比較し、t検定においてその効果の有意性を確かめた。

自立的行動習慣を計る質問項目は「自分の思ったことをはっきり言う」「周りの人に迷惑をかけずに行動する」「分からないことは、そのままにしないで調べる」「先のことを考えて、自分の計画を立てる」「困ったときでも前向きに取り組む」「人から言われなくても、自分から進んでやる」「誰とでも協力してグループ活動をする」「人の話をきちんと聞く」「困っている人がいたときに手助けする」「相手の立場になって考える」「ルールを守って行動する」「悪いことをしたと思ったら、自分からあやまる」の12項目である。

自己肯定感を計る質問項目は「学校の友達を増やしたい」「学校以外の友達を増やしたい」「勉強が得意になりたい」「今の自分を好きになりたい」「自分らしさをもちたい」「体力に自信をもちたい」の6項目である。

生活自立支援事業のアンケート結果からの客観的評価と具体的な子供の姿から推測される主観的評価の両面から評価、考察することにした。

① 自己決定の場を設け、自分が決めたことに責任をもち、最後までやる遂げることにより、自分自身の行動を決定していく力を養う。

森小屋づくりをすることを決め、年下の子供たちをまとめ、最後までやり遂げたS男

1日目の森小屋づくりをする活動の時である。雨が急に降ってきて、その後の天候もあまりよくないと予想されたため、グループごとに森小屋の屋根をブルーシートで覆って自分たちの手で最後まで作り上げるか、もしくは森小屋の土台だけを作り、その上にドームテントを手軽に建てるかを相談する場を設け、どちらにするか選択することにした。

森小屋の屋根をブルーシートで覆う場合はどうしてもブルーシートの間に隙間ができてしまい、雨や虫などが入り込む可能性があるというデメリットがある。既製品に頼らないため大変ではあるが、その分、完成時は自分たちの手で作り上げたという喜びが大きい。一方、土台の上に既製品のドームテントを建てる場合は、雨や虫などは入り込まないが、その分、自分たちの手で作り上げた気持ちが得られにくい。男子は雨が入り込むリスクを承知で屋根をブルーシートで覆い森小屋を作ることを選択し、女子の2グループは作った土台の上にドームテントを建てることにした。男子は既製のドームテントのように作れず、作成に時間もかかったが、作り上げた森小屋に満足げな表情をしていた。

特に、森小屋を作る際、男子で一番、上級生の高校生であったS男は、他は小学生ということもあったのであろう、「せっかくなら、自分たちで作ったものでないと、テントじゃ土台を作る意味がないよ。」と年下の小学生の子供たちを励ましなが、森小屋づくりに取り組んでいた。

S男の事前・事後のアンケート結果の自立的行動習慣と自己肯定感の平均値がともに高く変化している。(図1)

1回のキャンプでどれほど多くの効果をあげられたかは不明であるが、少なくともキャンプ終了後には日常生活にも意欲的に取り組んでいこうという思いを高めることはできたと推測する。

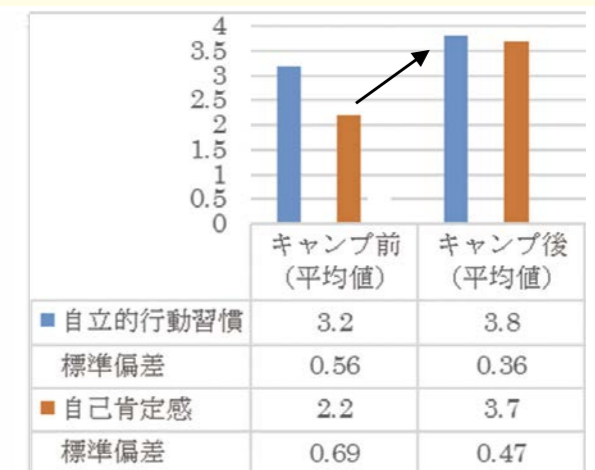


図1 S男の事前・事後のアンケート結果の変化

S男は、両親を事故で亡くし、その後、親戚の世話になるが、折り合いが合わず、施設に来ることになった。そのような養育歴のせいか、極度に失敗を恐れるところがあり、できないことや知らないことを人に見せることを嫌う面があるそうである。

愛育園の職員の方は、普段、「どうせ、だめだ。」とすぐにあきらめがちなS男が下級生を励ましながらかんがるとは思わなかったと話していた。



S男のキャンプ後の感想文より

森小屋づくりを頑張りました。完成したときは達成感があり、うれしかったです。3日間を振り返ると楽しいこともつらいこともあったけど、けがもなくみんなと協力して最後まで活動できてよかったです。

S男のキャンプ後の感想からは、キャンプ全般を通して成功体験だけでなく、失敗からも学ぶべきことが多くあったと推測される。子供たちがなるべく失敗や間違いをしないように周りの大人に支援されることが多い今日において貴重な体験となったと考える。また、立山青少年自然の家の森の中で、どこまで自分たちの手で住処を作るかということは、大人にとっては小さな問題かもしれないが、そこで寝なければいけない子供たちにとっては、初めての経験でもあり、大問題である。課題を自分たちで話し合い、自分たちの行動を決め取り組んだ意義も大きいように思う。

また、愛育園の職員の方からは「子供たちにとって、森小屋を作るのはたいへん負荷の高いプログラムであったが、だからこそ、普段の施設での生活で中・高校生に頼ってばかりいた小学生も、何かしなければいけないと考えて取り組んでいた。」「また中・高校生も、どうしても小学生の力を借りなくてはならない場面もあって、互いに助け合い、認め合えるよいプログラムであった。」などの感想をいただいた。このように、少し負荷の高いプログラムを行うことで、必然的に助け合わなくてはならない状況を作り出すことが、互いに協力し合う体験に効果的であったと考える。

② 参加者の頑張りやよさをなるべく見付け、本人に伝えることにより、参加者が自らのよさに目を向け、自己肯定感を高めるように努める。

粘り強く火起こし器で火を起こそうと取り組むT子

2日目の野外炊事では、火起こし器を使って火を起こし、野外炊事を行った。次々と他のグループが火を起こしていく中、1グループだけ、火を起こせないでいたグループがあった。職員がそっと、チャッカマンを渡そうとすると、リーダー格の高校3年生の子供は「それでは、意味がない。」と言ってかたくなに火を起こそうとがんばっていた。結局、その子供は火を起こすことはできなかったが、その姿を見ていた同じグループの中学校3年生のT子が後を引き継ぎ、苦勞の末、とうとう火を起こすことができた。周りの職員から「すごい、よく火が付いたね。」「最後まで、よくあきらめなかったね。」など絶賛の声をかけられていた。T子は調理好きということもあり、その後の野外炊事でもますます意欲的に活動していた。

T子は、今回のキャンプの事前の説明会の時には、投げやりな態度で説明を聞いていて、いかにもやる気がなさそうに見受けられた。しかし、キャンプ全般を通して周りの大人に励まされながら、少しずつ活動に意欲的に参加するようになっていった。そして、最終日の「ポイント探し」の活動では、愛育園の職員の方から、「普段なら途中で諦めてしまうT子が、最後までポイント探しをしていたのに感心した。」と言われるくらいに意欲的に活動に取り組んでいた。



T子の事前・事後のアンケート結果の自立的行動習慣と自己肯定感の平均値がともに高く変化している。(図2)

キャンプ前はすべての質問項目に対し「あまり思わない」、「まったく思わない」と答えていたのが、キャンプ後にはすべての項目において、「少し思う」と回答していた。

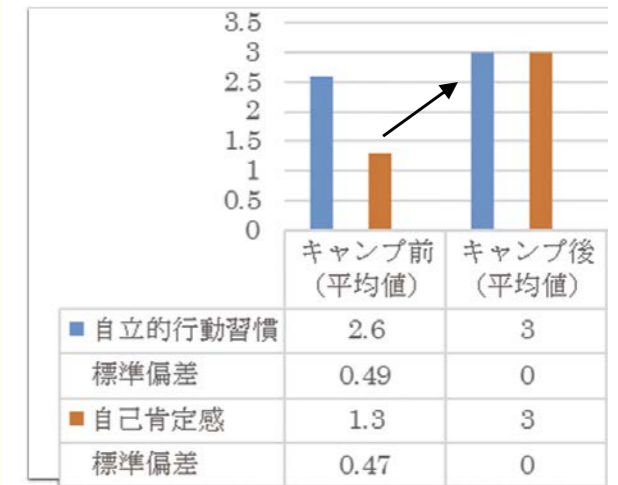


図2 T子の前後のアンケート結果の変化

施設職員の方の話によれば、T子は、家庭が崩壊し、学校でもトラブルメーカーとして見られ、施設に来ることになったそうである。以前は何に対しても、投げやりな姿が目立ったそうである。

活動中に、愛育園の職員の方、本所のスタッフが、意識してT子の頑張りを受け、励ます言葉がけをしたことが、T子が前向きに行動していくことに効果的に働いたと思いたい。

6 成果と課題



t検定において、自己肯定感の平均値は5%水準で効果が有意であった。(図3)

これは、自己決定の機会を多く設け、自分たちの行動を決め、決めた行動に責任をもってやり遂げられるように支援したり、参加者の頑張りやよさを見付け、本人に伝えたりしてきた効果であると考えられる。

自然の家は、自然体験活動を中心とした非日常的な活動が主である。また、空間的にも、いつもの生活空間とは異なり、これまでの生活をリセット

し、新しい自分と出会う可能性が高い。普段の生活では味わえない野外活動を通して、仲間と共に取り組むよさを感じるとともに、子供一人一人の自立の促す自己決定の場を設定することで、自己肯定感や自己有用感の向上を図ることができたものと考えられる。

施設の子供たちの多くは、親からの虐待、ネグレクトなど自分の力ではどうにもできない事情のため施設に来ている。その子の養育歴などの背景を知ってこそ、子供たちの思いや願いを的確に捉え、より内面に根差した温かい言葉がけや支援が行えるものと考えられる。また、1回の事業で大きな成果を得ることは難しい。今後も継続的な連携が望まれる。

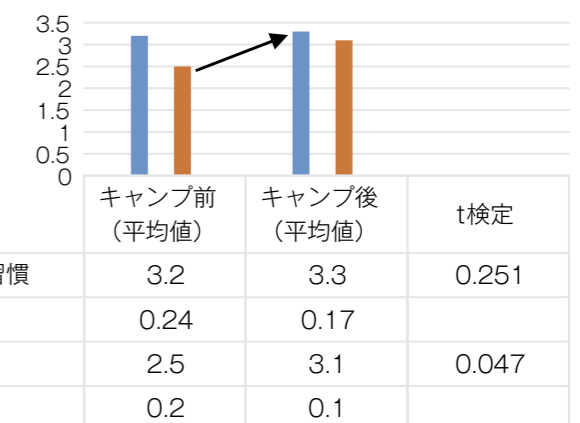


図3 参加者全員の事前・事後のアンケート結果の変化

研究の成果と課題

国立若狭湾青少年自然の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●指導者自身が、「参加者」として海に思い切り入り、自然のすばらしさや楽しさ、また怖さなどを体験し、自然に対する「原体験」を得られるきっかけを作る。 ●仕掛けを組むのではなく、ありのままの自然の家の海や山を体験してもらうことが大切であると考え、波が打ち寄せる砂浜、大きな砂場、木の実や落ち葉、枯れ枝の落ちている山道などをありのまま感じてもらう活動にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ●福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織する。 ●小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児（年長児）対象の「わかさわん うみはともだち」を実施する。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果 <ul style="list-style-type: none"> ○昨年度までの「小1プロブレム」への対応では、実際の活動が小学校1年生に接続しているかつながりを見出せない部分があった。今年度は、小学校入学に伴う問題としてではなく、幼児に自然体験が不足している、その指導者が自然体験を引き出しとして持ち得ていないという現状を考慮して、「幼児に自然体験を」というシンプルな目標設定を行い、様々な事業を企画した。 ○5歳児（年長児）とのかかわりを生かして、子どもゆめ基金体験の風リレーションシップ事業「若狭湾！海フェスティバル」では5歳児からスノーケリングを実施した。また幼児期の運動プログラム普及事業では若狭町の2園の保育園と連携して自然の家でのプログラム展開を行った。 ○うみはともだちの事業は、昨年度の海での体験に加え、今年度は11月に山での体験を追加し、1～2月にかけて、各園に訪問し、出前授業を行った。若狭湾を身近に感じる機会を増やすことで、自然体験への関心を深めることができた。 ●課題 <ul style="list-style-type: none"> ○次年度は、園付きの若狭湾の職員を固定して、園児の変容を調べることや過去2年にわたって行ってきた指導者研を初級と上級に分けるなど、持続可能なスタイルを視野に入れる必要がある。 	

国立乗鞍青少年交流の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●「講義や演習への参加」 <ul style="list-style-type: none"> 【考える】事前に、子供たちと関わる上で必要な知識や理論を講義に位置付けること。 【仲間を知る】ボランティアの仲間と一緒に楽しむことができる野外活動を位置付けること。 【技能の習得】基礎技術や指導法、安全対策を学べる実習や演習を位置付けること。 ●「各学校の活動への参加」 <ul style="list-style-type: none"> 【企画する】学校のプログラムに対応できるように企画・準備の時間を位置付けること。 【リーダー体験】子供たちを目の前にして主体的に活動できる場を位置付けること。 【振り返り】活動した後は、自分の姿を振り返る時間を位置付けること。 	<ul style="list-style-type: none"> ●担当する学校の先生との調整会議の位置付け方 <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちと出会う前に、事前に学校の先生と打合せをおこなうこと。（学校側のねらいや子供の実態、または配慮すべきことを確認しておく。） ・就寝後、学校の先生方と1日の振り返りや翌日の課題の確認をすること。 ●担当専門職の位置付けや相談コーナー <ul style="list-style-type: none"> ・大学側から事前に資料をいただき、学年や男女などを考慮して各学校に学生を位置付けること。 ・いつでも相談できる専門職を位置付け、困った時には支援に努めること。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果 <ul style="list-style-type: none"> ○プログラムの位置付けは有効であったといえる。学生たちの振り返りアンケートから、前半は、「講義や演習への参加」、後半は「各学校の活動への参加」という位置付けは学生にとって不安を解消させ、自信を持って子供たちの前に立てるプログラムであるといえる。 ○担当する学校の先生方との打合せ会議は、学生たちの安心感につながっているといえる。 ○学生の担当職員はもちろんのこと、たくさんの職員で彼らを支えていく雰囲気づくりがとても大切である。 ●課題 <ul style="list-style-type: none"> ○大学のカリキュラムの関係で学生の参加が難しくなっている。大学側との連携がさらに必要になってきている。広報や募集の仕方をさらに検討していきたい。 	

国立妙高青少年自然の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●プログラムの工夫によって、参加者の主体的な活動を軸に自立を促す。 ●歩く活動を繰り返すことによって、歩きの成長を実感できる。また、無言で歩く時間が「内省」していると考え、この時間が自立を促す。 ●対等な関係の中で、一人一人が認められ、安心して活動することができ、望ましい集団が作られていく。このような関係の中でグループの一員として役割を果たし、仲間と助け合いながら生活していくことが「自立」を促している。 	<ul style="list-style-type: none"> ●運営協議会での事業案の検討。 ●外部委員として、信州大学平野吉直教授、筑波大学坂本昭裕教授に事業に参画していただいている。 ●5つのステージを設定し、ステージごとに成長を促すプログラムの工夫。 ●1グループ6人編成。カウンセラーが2名付き、参加者の成長を適切にサポートする。 ●スタッフ研修を充実させ、指導の方向性や方針などを共通理解した上で、個々への適切な支援にあたった。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果① 「リーダーシップの5つの力をつけることができた。特に、「計画的に考え行動する力」「役割を意識し、集団の規範を守る力」をつけることができた」 ●成果② 「子供も保護者も「子供の成長」を実感できる体験活動が「自立」を促進する」 ●課題① 歩くことを繰り返す活動による効果の検証。 ●課題② 子供たち同士の対等な関係性がどのように作られていくのかを検証。 ●課題③ 子供たちの主体的な活動場面を作り、子供たちが「自立」を実感できるようなプログラムを検討していく。 	

国立能登青少年交流の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●信頼関係を深めるペアでの活動 ●挑戦することを通して達成感を味わう活動 ●参加者全員で振り返る活動 	<ul style="list-style-type: none"> ●事業1日目と2日目には、夜に児童養護施設職員との振り返りを行い、子供の様子やプログラムの効果を聞き取り、翌日のプログラムのねらいを共通理解した。 ●挑戦する活動であるサイクリングは、事前にペアでコースを考えた。活動の際には、子供一人一人のめあてをはっきりさせてスタートした。交流の家職員の支援は、迷いやすいコースの道案内と昼食、自転車トラブルの対応等、要所で支援をした。 ●サイクリングでのそれぞれの頑張りを参加者全員で認め合う場として、キャンドルセレモニーを位置付けた。児童養護施設の職員には、子供のがんばりを中心に発表するよう依頼した。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果： 児童養護施設職員と子供のペアでの活動を重ねること、挑戦をし、振り返る活動を通して新たな自分へ気づくことで、自己肯定感が高まった。特に、サイクリングは、事業前から行程をペアで考えることから始めたことで、より達成感がうまれているものと考え、振り返りでは、担当の児童養護施設職員と他のペアからじっくりと話を聞いてもらったことで、より達成感が深まった。 児童養護施設職員の変容が、担当する子供との関係を良好にしている。特に若い児童養護施設職員にとって、事業中の夜のミーティング等で、子供の変化やその見取り方について価値づけやアドバイスをしたことが、変容につながった。 ●課題： 子供の自立をより促すために、事業に参加する児童養護施設職員との事前の打ち合わせが必要である。児童養護施設長と事前打ち合わせを行ったが、6ペア12名という少人数で行っているため、事業に参加する職員とプログラムと一緒に検討することでねらいがより明確になり、プログラムに反映できる。また、打ち合わせを通して子供の自立について一緒に考えることで、児童養護施設職員にとって、事業中だけでなく事業後についての子供との関わり方を考えるきっかけともなる。 	

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト

平成28年度 プログラム開発事業

「体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発」

国立立山青少年自然の家

自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
<ul style="list-style-type: none"> ●子供たちの自己決定の機会を多く設け、自分たちの行動を決め、その行動に責任をもってやり遂げることにより、自立を促す契機とした。 ●指導者が子供たちの頑張りやよさを見付け、伝えることで、子供自身が自らのよさに目を向け、自己肯定感を高めるように努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ●施設職員と自然の家職員が事前の打合せを十分に行うことで、事業のねらいを明確にするとともに、指導・支援方法の共通化を図る。また、事後の打合せで子供のよさを伝え合うことで、事業後の生活への波及に努める。 ●1泊2日から2泊3日と事業の期間を延ばすことで、プログラムに余裕を作り、子供たちの自主性を高める機会を確保する。 ●子供たちにとって、やや負荷の高いプログラムを提供することで、必然的に子供たち同士が助け合い、関わりが深められるようにする。
成果と課題 <ul style="list-style-type: none"> ●成果：○子供たちの自己決定の機会を多く設け、自分たちで行動を決め、その行動に責任をもってやり遂げられるように支援したり、子供の頑張りやよさを見付け伝えたりすることで、自立的行動習慣に対する意識や自己肯定感を高めるのに効果があった。また、自己肯定感の「自分らしさをもちたい」という下位項目でも同様に効果が認められた。 ○子供たちが、いつもの生活空間とは異なる場所でやや負荷の高い野外活動をすることで、仲間と協力しながら自ら困難なことにチャレンジする意欲を高め、自らのよさや可能性を見付けることができた。 ●課題：○子供たちの養育歴などの背景を知ってこそ、子供たちの行動に隠された思いや願いを的確に捉え、より内面に根差した温かい言葉がけや支援が行えるものとする。今後も継続的な支援が行える連携のあり方を模索していく必要がある。 	

事業を終えて

私たち中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設は、青少年に質の高い体験活動の機会を提供し、自立した意欲あふれる青少年を育成することを願い、各施設が海型・山型の立地条件やそれぞれの特色を生かした事業に日々取り組んでいます。

本プログラム開発事業のテーマは、「体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発」として2年目の取組となります。中部・北陸ブロックの各施設が取り組んだ5事業から、体験活動をどのように企画・運営することが、青少年の自立に効果的であるのかということを通課題として事業を実施しました。本年度はその中で、「プログラムデザイン」、「指導のあり方」、「スタッフ研修のあり方」の視点から事業運営のエッセンスを整理しました。

本報告書にまとめられた成果が、全国各地の実践に活用され、さらに新たなプログラムが開発され、青少年の自立の一助になることを心より願っております。

最後に、本プログラム開発事業に対して、継続的に親身にご指導を頂きました信州大学理事兼副学長 平野 吉直先生、筑波大学人間総合科学研究科教授 坂本 昭裕先生に心より感謝を申し上げます。

平成29年3月
独立行政法人国立青少年教育振興機構
中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局
国立立山青少年自然の家 次長 桑山 宗大

平成28年度プログラム開発事業 体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家

■発行日/平成29年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所

目的

課題を抱える青少年を対象とした自然体験活動や全ての青少年の自立を促進するための集団宿泊体験活動のプログラムを開発する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

得ようとする成果

<求める成果>

○課題を抱える青少年を対象とした体験活動プログラムや全ての青少年の自立を促進するためのプログラムの展開。

○量的・質的効果検証方法を活用して、子どもたちの変容をとらえ、プログラムの有効性を検証する。

成果の普及・活用

本研究により開発したプログラムの実際や子どもの変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構中部・北陸ブロック5施設の教育事業並び研修支援事業に生かすとともに、全国の国立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる体験活動をとおして自立を促進するためのプログラム・手法などを具体的に示し、成果の普及と活用を図る。

研究機関

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家
国立若狭湾青少年自然の家・国立立山青少年自然の家
国立妙高青少年自然の家（事務局）

研究期間

平成28年4月1日～平成29年3月31日

本プログラム開発事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

全ての子供・若者が健やかに成長し、自立活躍できる社会を目指した子供・若者育成支援推進大綱（H28.2.9）では、「困難を有する子ども・若者やその家族を支援する」として「困難な状況ごとの取組」を整理し、推進すべき内容を示している。そこでは、様々な事情で、健やかな成長を遂げていく上での困難を抱えたり、不利な立場に置かれたりしている青少年の成長を社会全体で支えていくことを求めている。

国立青少年教育施設が、豊かな体験活動をとおして、課題を抱える青少年の成長を支援するとともに、全ての青少年の自立を促進するために開発したプログラムや事業を実施する際の関係機関との連携のあり方を広く普及することは、国の施策を具体化するナショナルセンターとしての大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

これまでに開発したプログラムを基に、子どもに身につけてほしい力を確実に伸ばすことができるようなプログラムの運営や、関係機関との連携及び成果の普及など新たな展開を図る。

指導者

信州大学 理事・副学長 平野 吉直 先生
筑波大学 教授 坂本 昭裕 先生

担当者

国立能登青少年交流の家
次長 河 辺 誠 二
企画指導専門職 布 施 幸 治

国立乗鞍青少年交流の家
次長 山 川 忠 彦
企画指導専門職 大 坪 亜 紀

国立立山青少年自然の家
次長 増 田 共 子
主任企画指導専門職 小 島 秀 樹

国立若狭湾青少年自然の家
次長 奥 村 広 一
主任企画指導専門職 入 矢 完

国立妙高青少年自然の家
次長 桑 山 宗 大
企画指導専門職 田 原 朋 子

調査研究の計画

- (1) 第1回企画会議・研修会
(研究テーマ・研究計画の検討)
会場：国立妙高青少年自然の家 6月2日～3日
○プログラム開発事業の計画検討
○子供の見取りと変容尺度について
講師：筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生
- (2) 第2回企画会議・研修会(対象事業の報告)
会場：国立能登青少年交流の家 10月27日～28日
○各施設で実施した事業の概要と成果の報告
○事業成果のまとめ方についての検討
- (3) 第3回企画会議・研修会(報告書の検討)
会場：国立若狭湾青少年自然の家 12月8～9日
○各施設で開発したプログラムの成果と課題の確認
○報告書現行の推敲と校正
- (4) 第4回企画会議・研修会
(成果と課題の確認・次年度の計画)
会場：国立乗鞍青少年交流の家 2月22日～23日
○平成29年度の事業企画及び全体計画の検討



国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜
TEL.0770-54-3100 <http://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭湾国定公園の中央にある田島半島の一角に位置する若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目の前に広がる専用ビーチを有し、そこでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL.0255-82-4321 <http://myoko.niye.go.jp/>

妙高戸隠連山国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13
TEL.0577-31-1011 <http://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳 (3,026m) の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL.0767-22-3121 <http://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋(はくい)市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1
TEL.076-481-1321 <http://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

■中部・北陸ブロック

国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家・国立乗鞍青少年交流の家
国立能登青少年交流の家・国立立山青少年自然の家